

令和8年度全国学力・学習状況調査及びPISA2025 の結果（ICT関係）について

令和 8 年度全国学力・学習状況調査について

調査の目的

義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から、

- 全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図る。
- 学校における児童生徒への学習指導の充実や学習状況の改善等に役立てる。
- そのような取組を通じて、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立する。

調査概要

調査実施日	令和8年4月20日(月)～5月29日(金)
調査対象	小学校6年生、中学校3年生
調査事項	①児童生徒：教科調査〔国語、算数・数学、 英語（中学校のみ） 〕 / 質問調査 ②学 校：質問調査 ※令和5年度以来の実施
調査問題	・学習指導要領で育成を目指す、知識及び技能や思考力、判断力、表現力等を問う問題を出題 ・「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善のメッセージを発信
今年度の調査の特徴	・中学校・英語（4技能「聞くこと」「読むこと」「書くこと」「話すこと」）の 全面CBT（Computer Based Testing）化 ※「話すこと」調査のみ令和5年度もCBTで実施 ・小学校・児童質問でのランダム方式の導入

調査対象及び集計対象
児童生徒数・学校数

	小学校				中学校			
	調査対象 児童数(※1)	集計対象 児童数(※2)	調査対象 学校数	集計対象 学校数(※2)	調査対象 生徒数(※1)	集計対象 生徒数(※2)	調査対象 学校数	集計対象 学校数(※2)
公立	990,870人	922,778人	18,126校	18,077校 (99.7%)	953,990人	842,491人	9,249校	9,146校 (98.9%)
国立	6,264人	5,949人	75校	74校 (98.7%)	9,826人	8,809人	80校	77校 (96.3%)
私立	13,580人	6,246人	252校	120校 (47.6%)	84,223人	14,060人	799校	207校 (25.9%)
合計	1,010,714人	934,973人	18,453校	18,271校 (99.0%)	1,048,039人	865,360人	10,128校	9,430校 (93.1%)

(※1) 調査対象児童生徒数について、公立及び国立は、調査実施前に学校から申告された児童生徒数、私立は、令和7年度学校基本調査による。
調査当日までに増減した可能性がある。

(※2) 集計対象児童生徒数・学校数は、調査の実施日に調査を実施した数。集計対象児童生徒数は、回収した解答用紙が最も多かった教科（小学校：算数、中学校：数学）の解答用紙の枚数で算出。

① ICTの活用状況等

ポイント

- ICT機器を「**ほぼ毎日**」「**週3回以上**」活用していると回答した学校は、**小学校95.4%、中学校93.5%**でほぼ横ばいであり、**活用の定着**が見られる。また、ICT機器を家庭で利用できるようにしていると回答した学校は増加傾向であり、半数以上の児童生徒が週1回以上活用している。
- ICT機器が、**不登校児童生徒、特別な支援を要する児童生徒、外国人児童生徒等に対する学習活動等の支援や、児童生徒の心身の状況の把握等にも活用**されている。

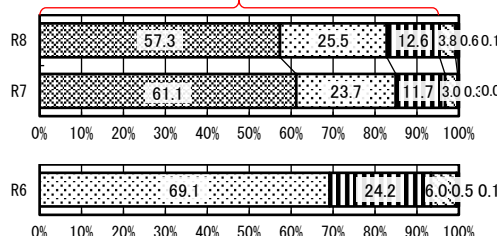
学校質問
小学校〔60〕
中学校〔68〕

あなたの学校では、児童〔生徒〕一人一人に配備されたPC・タブレットなどのICT機器を、授業でどの程度活用しましたか。

■ ほぼ毎日（1日に複数の授業で活用）
 ■ ほぼ毎日（1日に1回くらいの授業で活用）
 ■ 週3回以上
 ■ 週1回以上
 ■ 月1回以上
 ■ 月1回未満

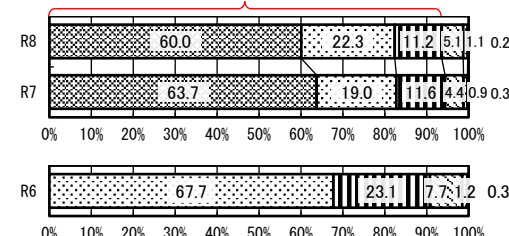
小学校

95.4



中学校

93.5



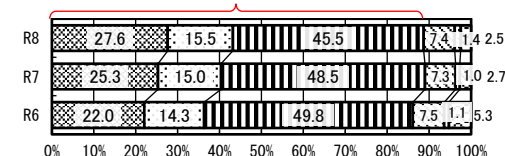
学校質問
小学校〔67〕
中学校〔75〕

あなたの学校では、児童〔生徒〕一人一人に配備されたPC・タブレットなどのICT機器を、どの程度家庭で利用できるようにしていますか。

■ 毎日持ち帰って、毎日利用させている
 ■ 毎日持ち帰って、時々利用させている
 ■ 時々持ち帰って、時々利用させている
 ■ 持ち帰らせていない
 ■ 持ち帰ってはいけないこととしている
 ■ 臨時休業等の非常時のみ、持ち帰ることとしている

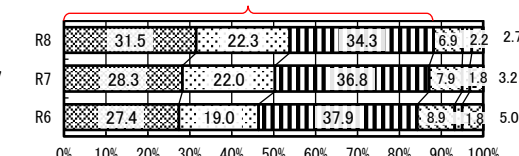
小学校

88.6



中学校

88.1



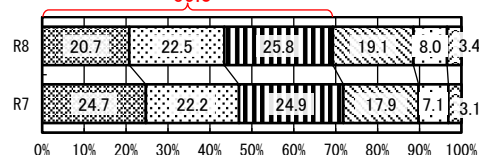
児童〔35〕
生徒〔35〕

5年生まで〔1、2年生のとき〕に受けた授業で、PCやタブレット等のICT機器を、どの程度使用しましたか。

■ ほぼ毎日（1日に複数の授業で活用）
 ■ ほぼ毎日（1日に1回くらいの授業で活用）
 ■ 週3回以上
 ■ 週1回以上
 ■ 月1回以上
 ■ 月1回未満

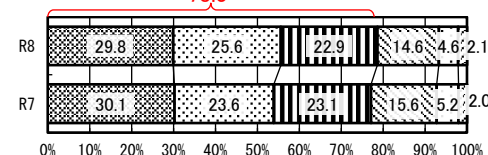
小学校

69.0



中学校

78.3



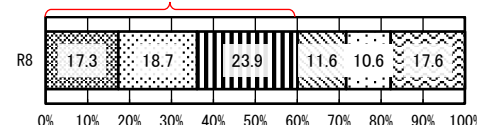
児童〔37-11〕
生徒〔37-11〕

5年生まで〔1、2年生のとき〕の学習の中で、家庭学習でPCやタブレット等のICT機器を、どの程度使用しましたか。【新規】

■ ほぼ毎日
 ■ 週3回以上
 ■ 週1回程度
 ■ 月1回程度
 ■ 月1回未満
 ■ 活用していない

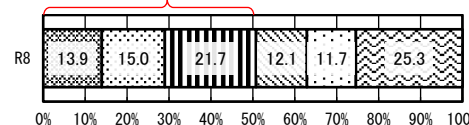
小学校

59.9



中学校

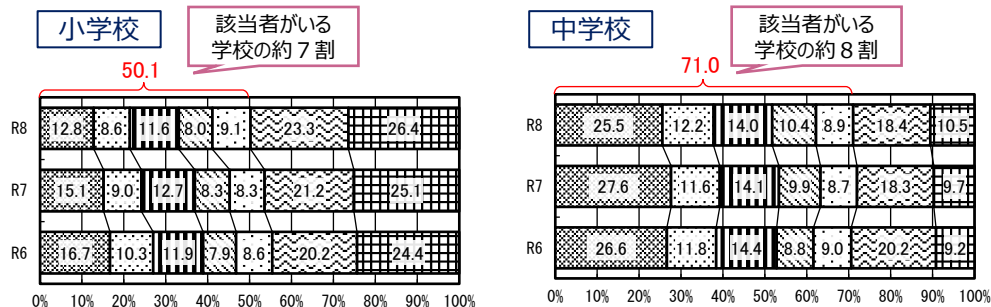
50.6



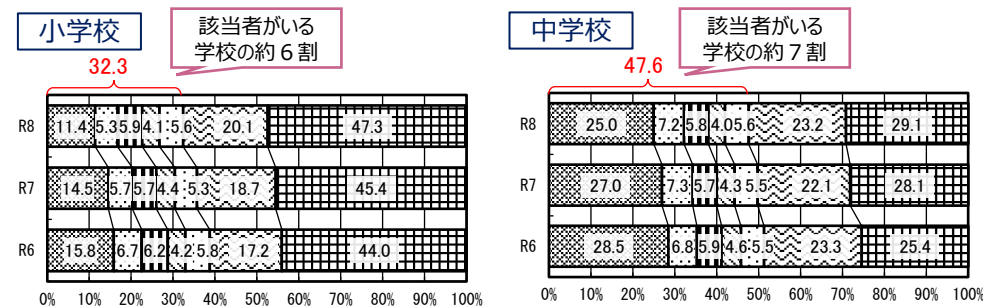
児童〔生徒〕一人一人に配備されたPC・タブレットなどのICT機器について、次のような用途でどの程度活用していますか。

■ ほぼ毎日 ■ 週3回以上 ■ 週1回以上 ■ 月1回以上 ■ 月1回未満 ■ 活用していない ■ 該当する児童〔生徒〕がない

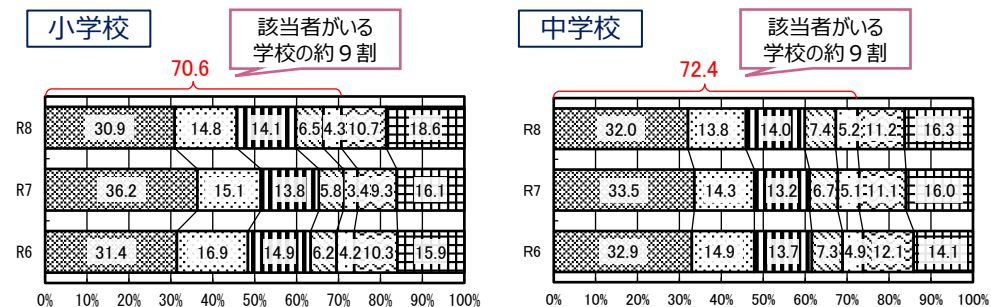
(1) 不登校児童〔生徒〕に対する学習活動等の支援（授業配信を含む）



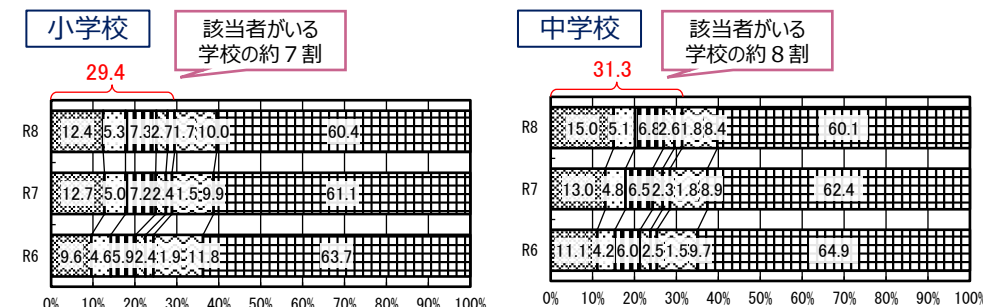
(2) 希望する不登校児童〔生徒〕に対する授業配信



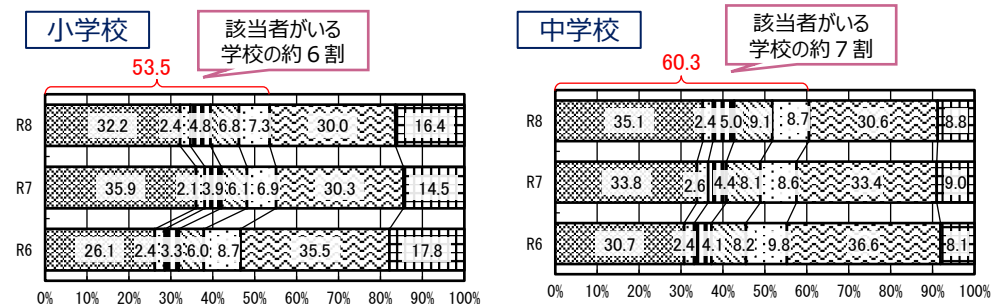
(3) 特別な支援を要する児童〔生徒〕に対する学習活動等の支援



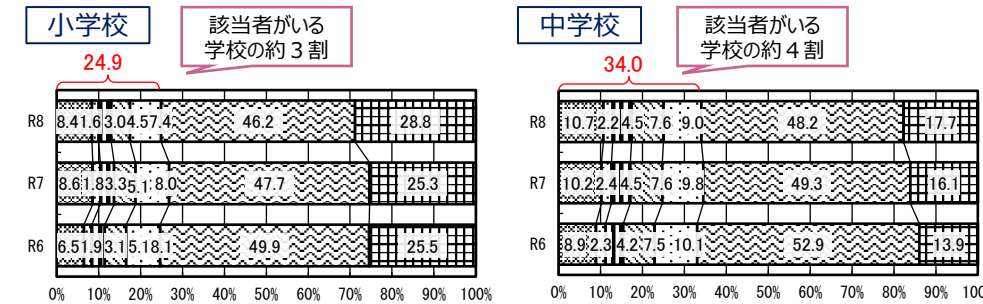
(4) 外国人児童〔生徒〕に対する学習活動等の支援



(5) 児童〔生徒〕の心身の状況の把握



(6) 児童〔生徒〕に対するオンラインを活用した相談・支援



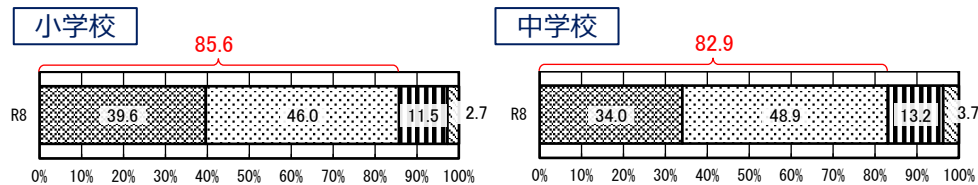
ICT活用による効果 ～ICT活用の効力感～

- 約9割の児童生徒が、ICT機器については「分からないことがあった時に、すぐに調べることができる」「画像や動画、音声等を活用することで、学習内容がよく分かる」「友達と考えを共有したり比べたりしやすくなる」などと考えている。
- ICT機器が日常の学習に定着し、効果的な活用ができてきている様子が見られる。

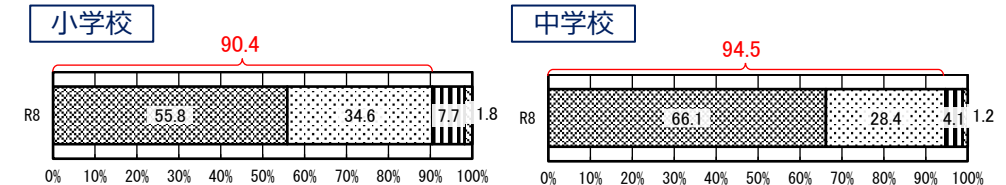
児童〔37〕 生徒〔37〕 5年生まで〔1、2年生のとき〕の学習の中でPC・タブレットなどのICT機器を活用することについて、次のことはあなたにどれくらい当てはまりますか。

■ そう思う ▨ どちらかといえば、そう思う ▩ どちらかといえば、そう思わない ▩ そう思わない

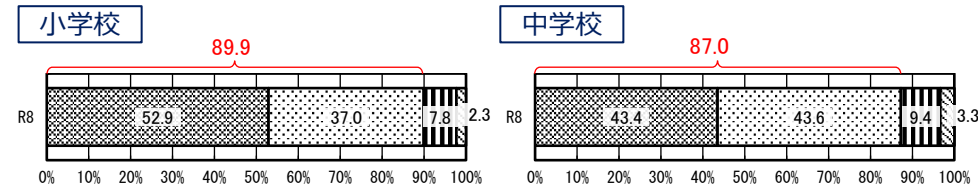
(1) 自分のペースで理解しながら学習を進めることができる。



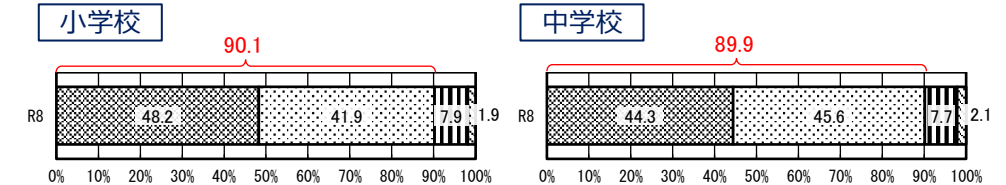
(2) 分からないことがあった時に、すぐ調べることができる。



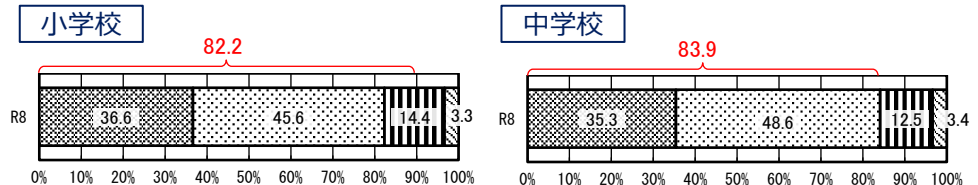
(3) 楽しみながら学習を進めることができる。



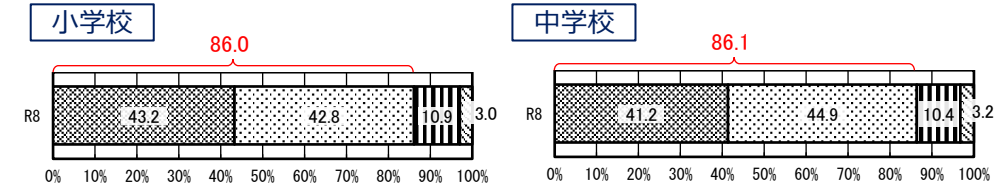
(4) 画像や動画、音声等を活用することで、学習内容がよく分かる。



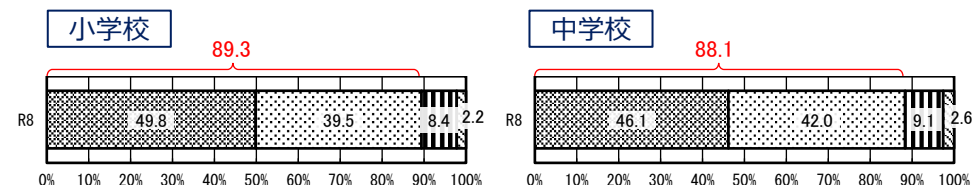
(5) 自分の考えや意見を分かりやすく伝えることができる。



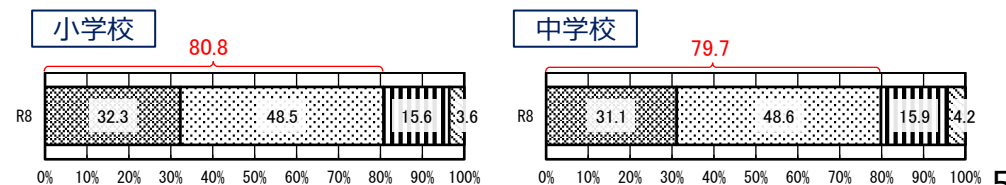
(6) 友達と考えを共有したり比べたりしやすくなる。



(7) 友達と協力しながら学習を進めることができる。

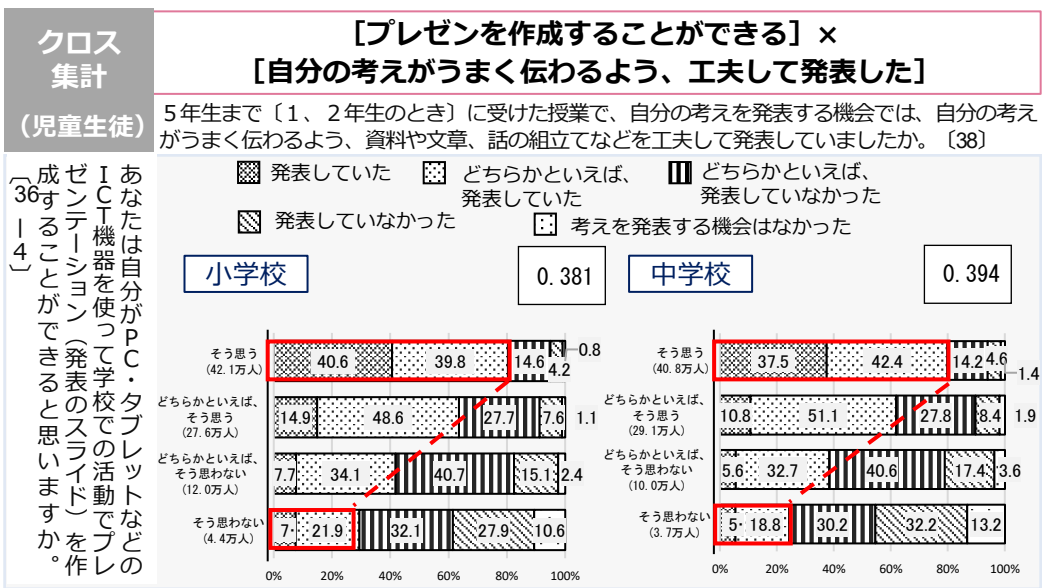
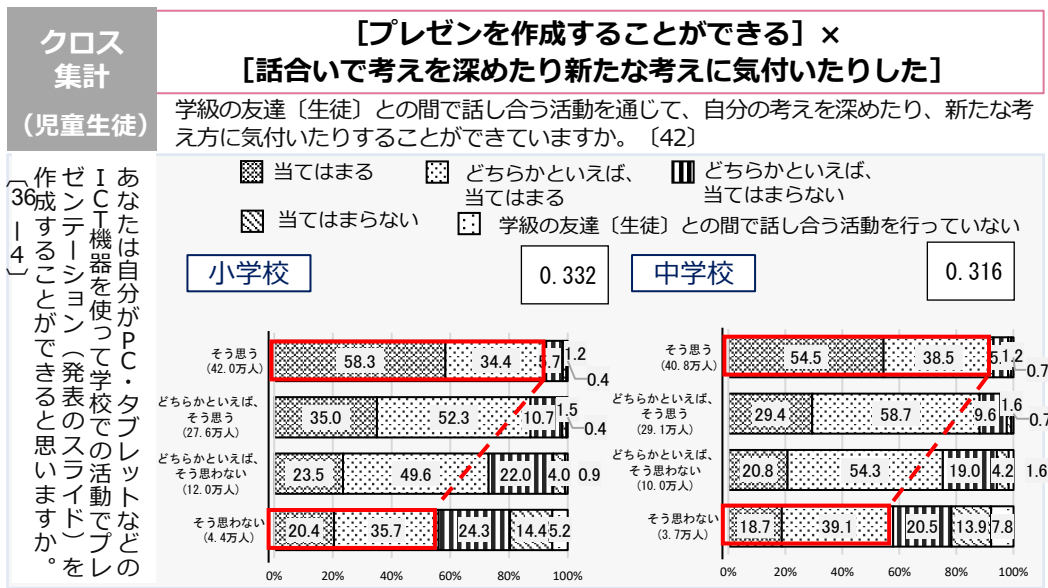
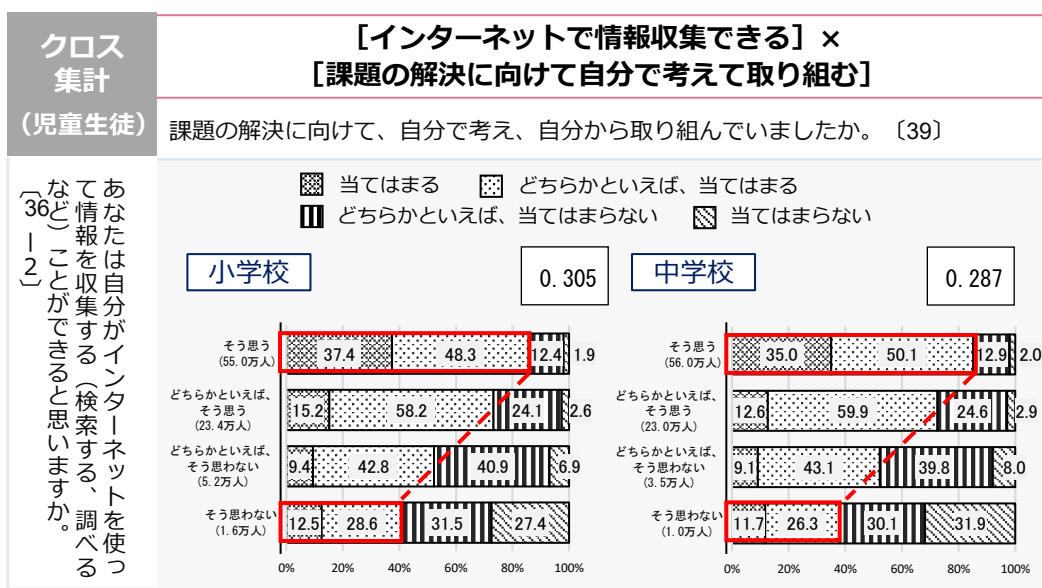
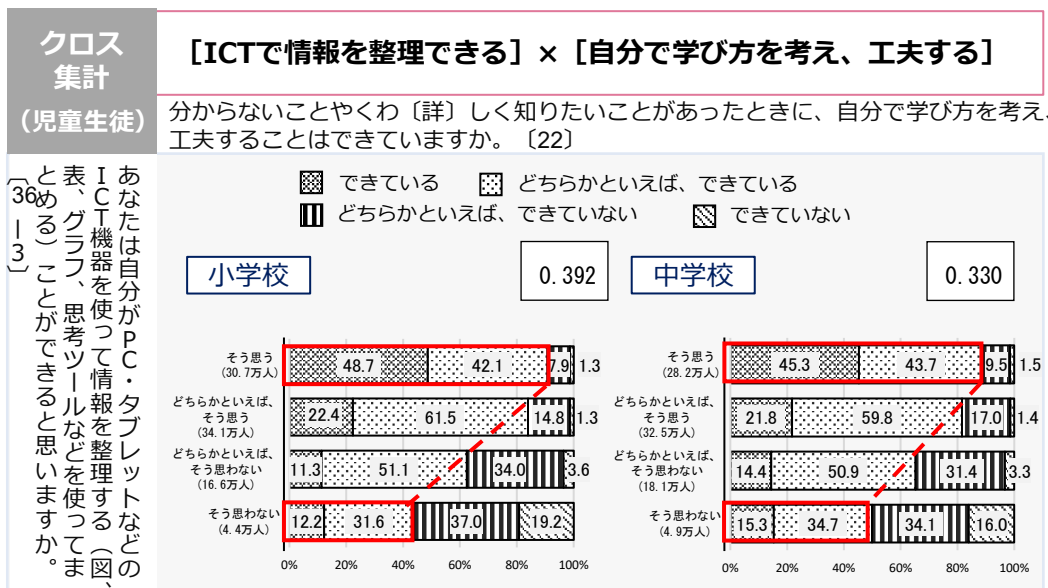


(8) 次の学習に取り組む際に、自分の学習の状況や成果を振り返ることができる。



ICT活用による効果 ～ICTを活用する自信×学びへの意欲・工夫～

- **ICT機器を活用する自信がある児童生徒ほど、分からないことや詳しく知りたいことがあったときに自分で学び方を考えて工夫したり、課題の解決に向けて自分で考えて取り組んだりしている**と考えている傾向が見られる。（**個別最適な学び**）
- **ICT機器を活用する自信がある児童生徒ほど、話し合う活動を通じて自分の考えを深めたり新たな考えに気づいたり、自分の考えがうまく伝わるように資料や文章、話の組立てなどを工夫して発表したりしている**と考えている傾向が見られる。（**協働的な学び**）

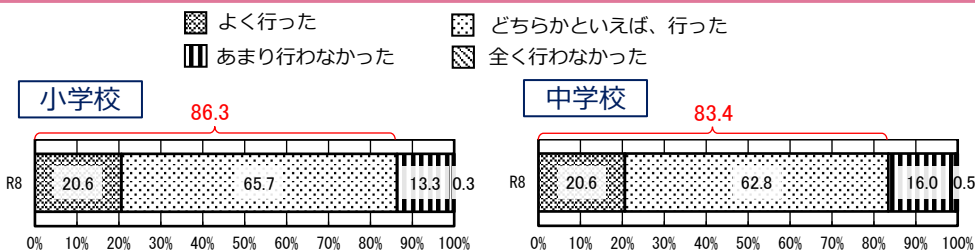


ICT活用による効果 ～ICT機器を活用した見方・考え方を働かせる指導～

- ICT機器を活用して各教科等における見方・考え方を働かせるような学習指導を行っていると考えている学校は、小学校86.3%、中学校83.4%。
- そのような学校ほど、児童生徒の個別最適な学び・協働的な学びの実現のための学習活動を取り入れたり身につけたことを課題解決に生かすことができる機会を設けたりしていると考えている傾向が見られる。

学校質問
小学校〔68〕
中学校〔76〕

ICT機器を活用して各教科等における見方・考え方を働かせるような学習指導を行いましたか。【新規】

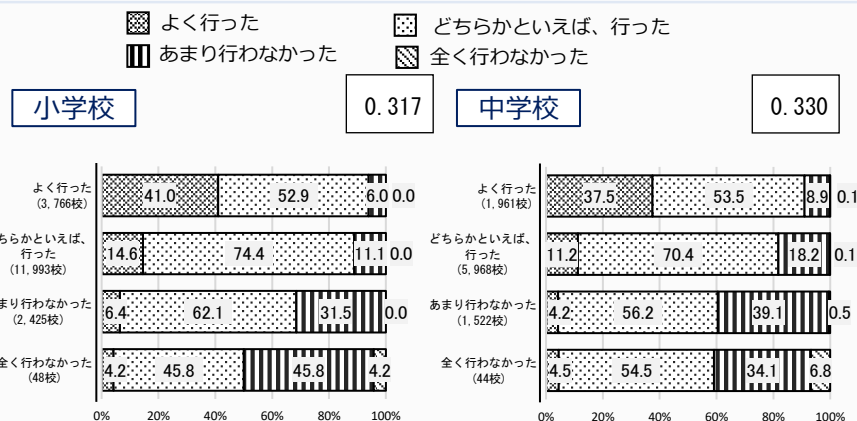


クロス
集計
(学校質問)

【ICTを活用した見方・考え方を働かせる学習指導】×
【身につけたことを課題解決に生かす】

調査対象学年の児童（生徒）に対して、前年度までに、各教科等で身につけたことを、様々な課題の解決に生かすことができるような機会を設けましたか。〔36〕

ICT機器を活用して各教科等における見方・考え方を働かせるような学習指導を行いましたか。〔68・76〕

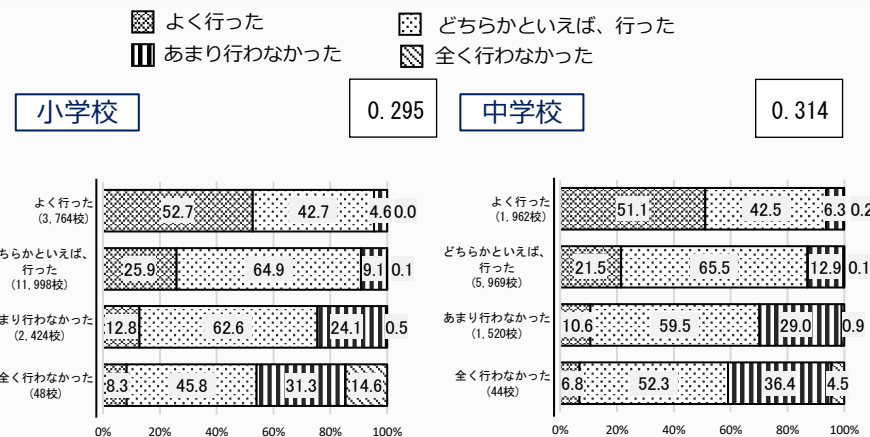


クロス
集計
(学校質問)

【ICTを活用した見方・考え方を働かせる学習指導】×
【解決に向けて話し合い、まとめ、表現する】

調査対象学年の児童（生徒）に対して、前年度までに、授業において、児童（生徒）自ら学級やグループで課題を設定し、その解決に向けて話し合い、まとめ、表現するなどの学習活動を取り入れましたか。〔33〕

ICT機器を活用して各教科等における見方・考え方を働かせるような学習指導を行いましたか。〔68・76〕

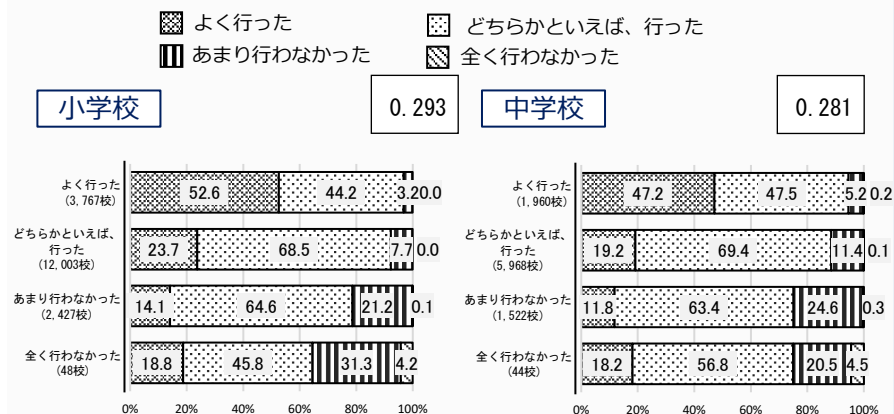


クロス
集計
(学校質問)

【ICTを活用した見方・考え方を働かせる学習指導】×
【一人一人に応じて課題を工夫】

調査対象学年の児童（生徒）に対して、前年度までに、学習指導において、児童（生徒）一人一人に応じて、学習課題や活動を工夫しましたか。〔31〕

ICT機器を活用して各教科等における見方・考え方を働かせるような学習指導を行いましたか。〔68・76〕

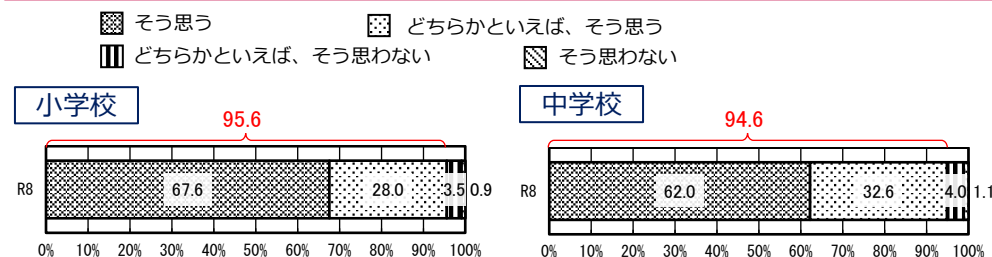


② ICT機器やインターネット活用に関するルールやマナー

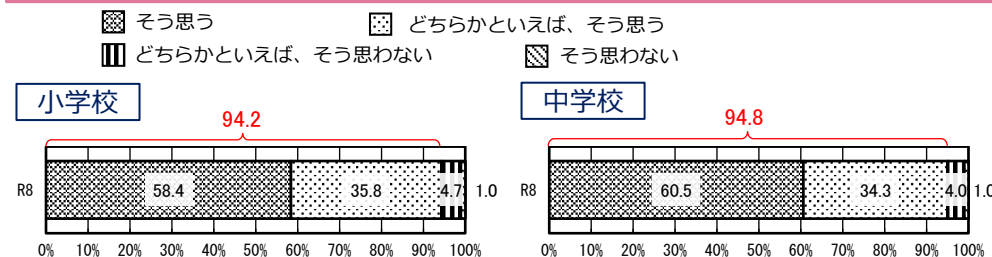
ポイント

- ほぼ全ての児童生徒が、ICT機器やインターネットの利用に当たってのルールやマナーを学校で学んでおり、ルールやマナーを守って活用できると回答している。そのような児童生徒ほど、いじめがどんな理由があってもいけないことだと思っている傾向が見られる。

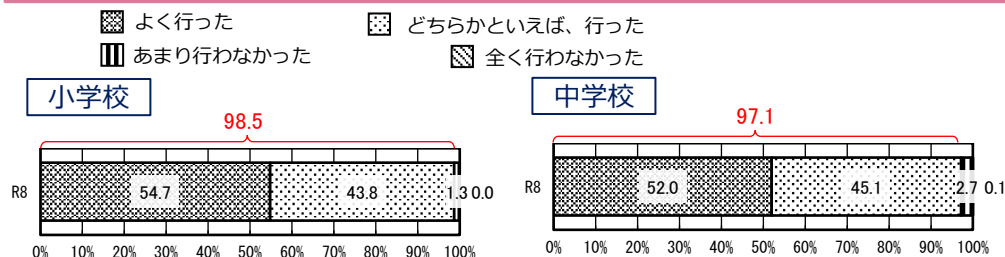
児童〔37-9〕 ICT機器やインターネットの利用に当たってのルールやマナーに
生徒〔37-9〕 関して学校で教えてもらっている。【新規】



児童〔37-10〕 ICT機器やインターネットについて、ルールやマナーを守って活
生徒〔37-10〕 用することができる。【新規】



学校質問
小学校〔69〕 ICT機器やインターネットの利活用について、目的や場面に応じた適
中学校〔77〕 切な使い方や、利活用にあたってのルールやマナー（長時間利用防
止や情報の取扱いも含む）に関する指導を行いましたか。【新規】

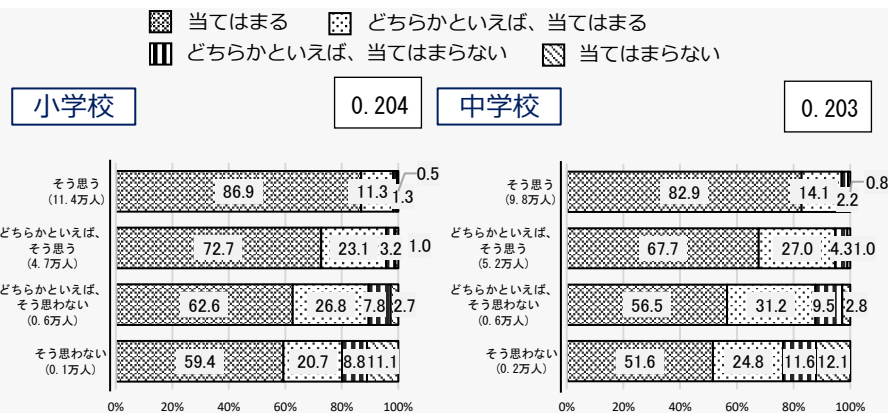


クロス 集計 (児童生徒)

ICT機器やインターネットの
利用に当たってのルールやマナーに
関して学校で教えてもらっている。
〔37-9〕

【ICTのルールやマナーを学校で教えてもらっている】 ×
【いじめについての規範意識】

いじめは、どんな理由があってもいけないことだと思いますか。〔12〕

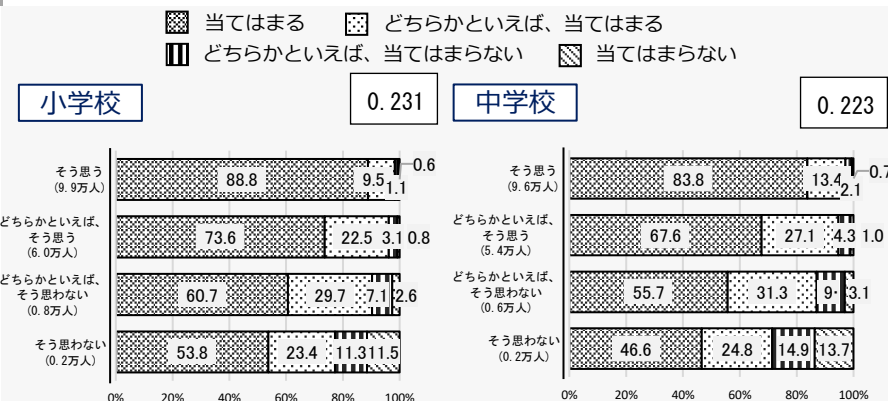


クロス 集計 (児童生徒)

ICT機器やインターネットの
利用に当たってのルールやマナーに
関して学校で教えてもらっている。
〔37-10〕

【ICTのルールやマナーを守って活用している】 ×
【いじめについての規範意識】

いじめは、どんな理由があってもいけないことだと思いますか。〔12〕



③ 教員研修やサポート

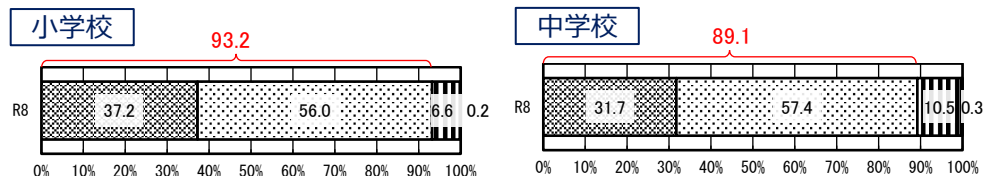
ポイント

- 教員がICT機器の効果的な使い方を学ぶための研修や自己研鑽等の機会を十分に設けていると考えている学校、ICT機器の活用に関して学校内外のサポートを受けられていると考えている学校は、小学校・中学校ともに約8～9割。
- そのような学校ほど、ICT機器を活用して各教科等における見方・考え方を働かせるような学習指導を行っていると考えている割合が高い。

学校質問
小学校〔58〕
中学校〔66〕

児童〔生徒〕が学びを深めるための指導改善に向けた取組として、教員がコンピュータなどのICT機器の効果的な使い方を学ぶために必要な情報や研修、自己研鑽の機会等を十分に設けていますか。【新規】

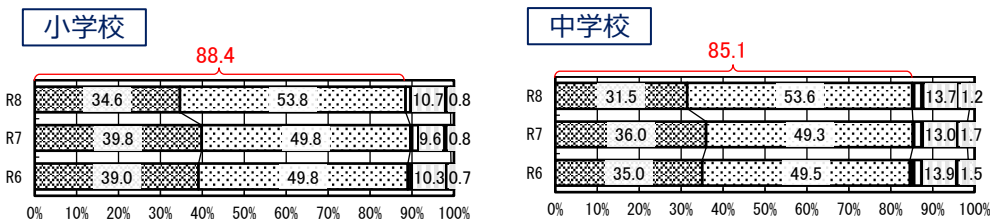
■ 当てはまる ■ どちらかといえば、当てはまる
■ どちらかといえば、当てはまらない ■ 当てはまらない



学校質問
小学校〔59〕
中学校〔67〕

コンピュータなどのICT機器の活用に関して、学校内外において十分に必要なサポートが受けられていますか。

■ そう思う ■ どちらかといえば、そう思う
■ どちらかといえば、そう思わない ■ そう思わない



クロス集計

(学校質問)

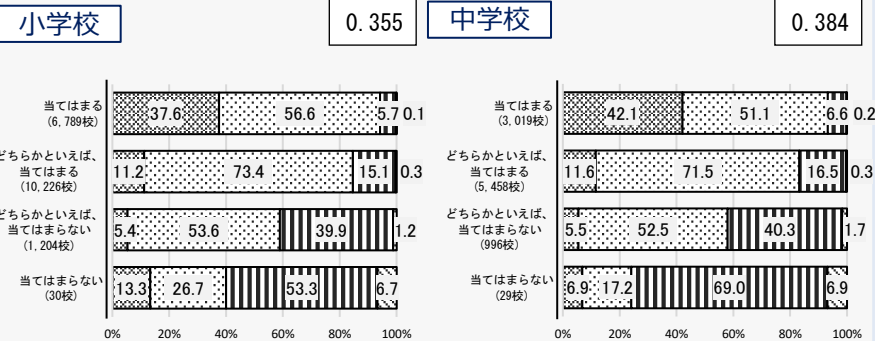
児童〔生徒〕が学びを深めるための指導改善に向けた取組として、教員がコンピュータなどのICT機器の効果的な使い方を学ぶために必要な情報や研修、自己研鑽の機会等を十分に設けていますか。〔58・66〕

【ICT研修の機会を十分に設けている】×

【ICTを活用して見方・考え方を働かせる学習指導を行っている】

ICT機器を活用して各教科等における見方・考え方を働かせるような学習指導を行いましたか。〔68・76〕

■ よく行った ■ どちらかといえば、行った
■ あまり行わなかった ■ 全く行わなかった



クロス集計

(学校質問)

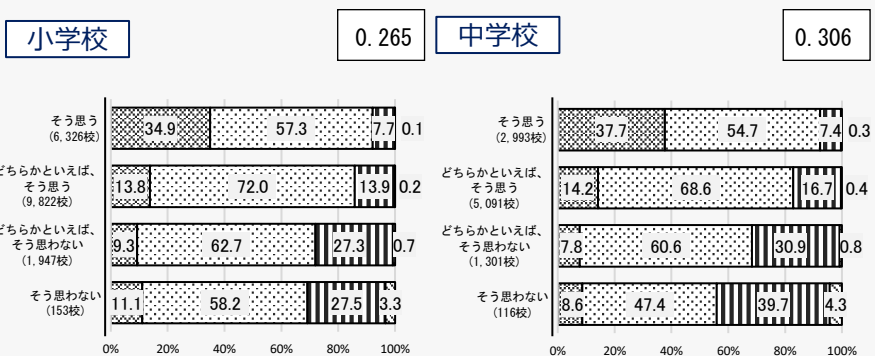
コンピュータなどのICT機器の活用に関して、学校内外において十分に必要なサポートが受けられていますか。〔59・67〕

【ICT活用についての十分なサポート】×

【ICTを活用して見方・考え方を働かせる学習指導を行っている】

ICT機器を活用して各教科等における見方・考え方を働かせるような学習指導を行いましたか。〔68・76〕

■ よく行った ■ どちらかといえば、行った
■ あまり行わなかった ■ 全く行わなかった

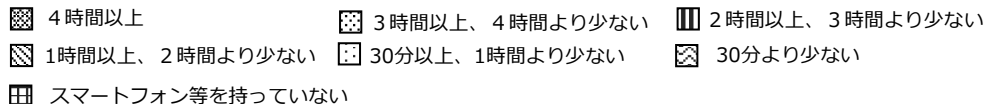


「SNSや動画視聴の長さ」と学力の関係

- SNSや動画視聴等の利用時間が長い児童生徒ほど、各教科の正答率・スコアが低い傾向が見られる。
- 一方で、ICTを活用する自信がある児童生徒ほど、各教科の正答率・スコアが高い傾向が見られる。また、授業におけるICT機器の活用頻度と各教科の正答率・スコアとの関係にも、一定の関係が見られる。
- これらの結果から、ICTを受動的に利用するにとどまらず、主体的・能動的に活用できるよう、授業等を通じた情報活用能力を育成することが、学力向上に寄与する可能性が示唆される。

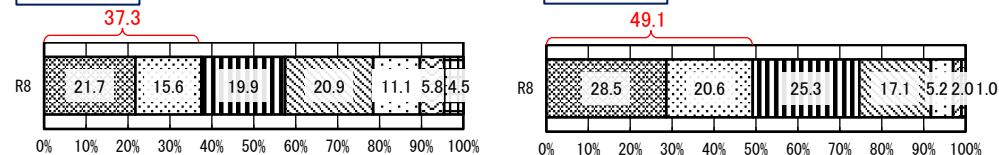
児童〔4〕
生徒〔4〕

普段（月曜日から金曜日）、1日当たりどれくらいの時間、スマートフォンや携帯電話、パソコン、タブレット、ゲーム機、テレビ等（以下、「スマートフォン等」）でSNSや動画視聴などをしますか（スマートフォン等を使って学習する時間やゲームをする時間を除く）。



小学校

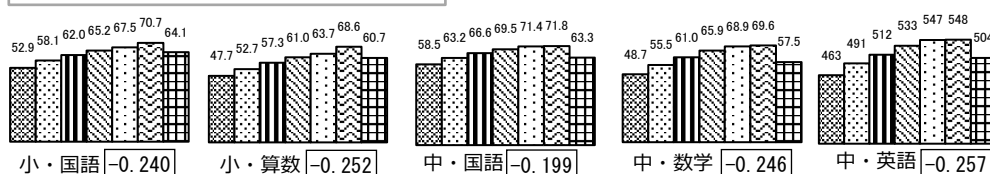
中学校



選択肢ごとの教科の平均正答率・平均IRTスコア

※ 相関係数は「スマートフォン等を持っていない」の回答を除外して算出

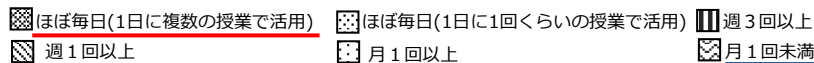
クロス集計



参考：授業におけるICT機器の使用頻度と各教科の正答率・スコアの関係

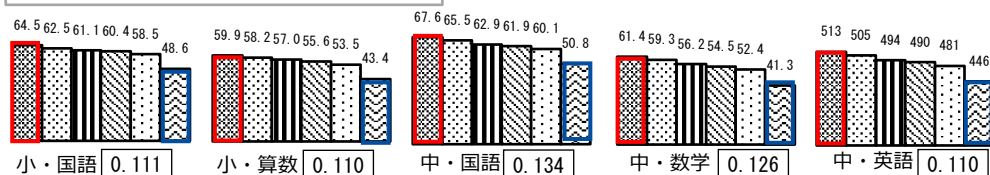
児童〔35〕
生徒〔35〕

5年生まで〔1、2年生のとき〕に受けた授業で、PC・タブレットなどのICT機器を、どの程度使用しましたか。



選択肢ごとの教科の平均正答率・平均IRTスコア

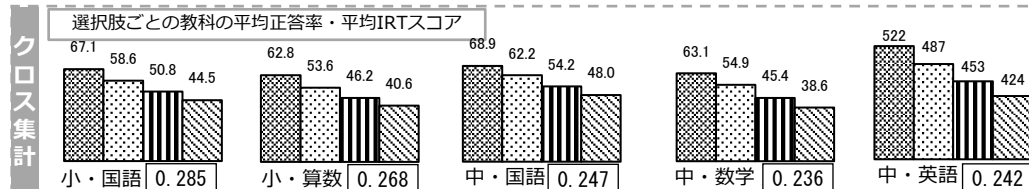
クロス集計



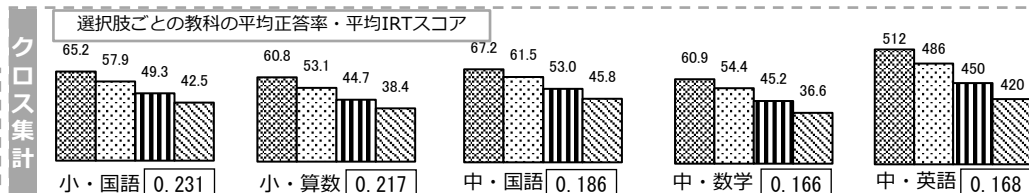
「ICTを活用する自信」と学力の関係



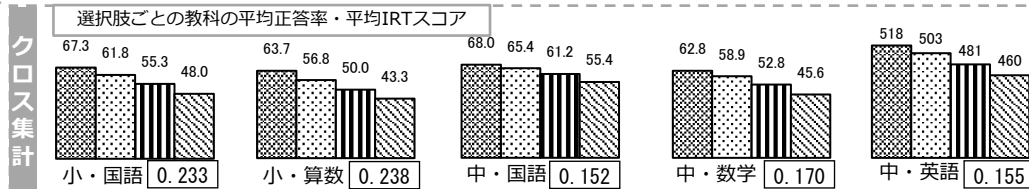
児童〔36-1〕 タブレットなどのICT機器で文章を作成する（文字、コメントを書くなど）ことができると思えますか。



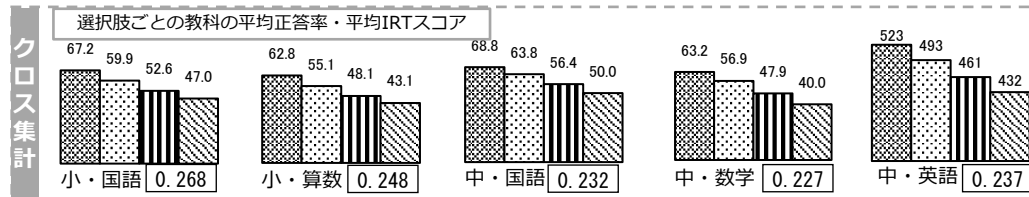
児童〔36-2〕 インターネットを使って情報を収集する（検索する、調べるなど）ことができると思えますか。



児童〔36-3〕 タブレットなどのICT機器を使って情報を整理する（図、表、グラフ、思考ツールなどを使ってまとめる）ことができると思えますか。



児童〔36-4〕 タブレットなどのICT機器を使って学校での活動でプレゼンテーション（発表のスライド）を作成することができると思えますか。



「社会経済的背景 (SES)」 × 「ICTの活用」 × 「教科の正答率・スコア」の関係

三重クロス集計

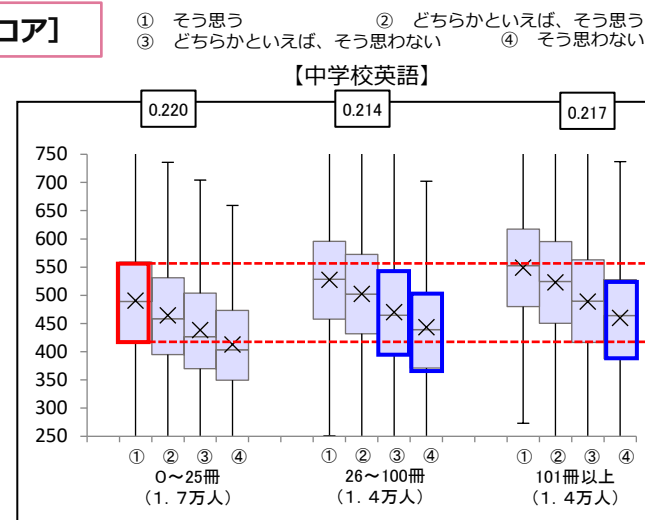
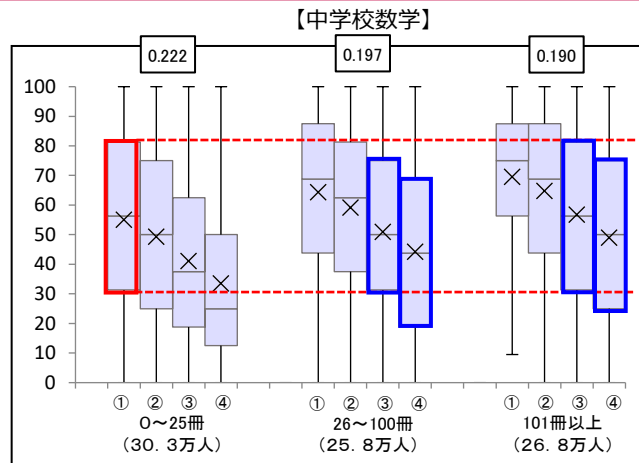
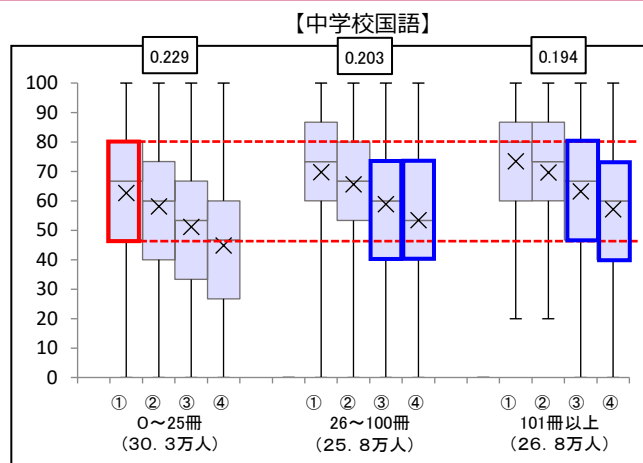
○ 家庭の社会経済的背景(SES: Socio-Economic Status)*が低いほど、各教科の正答率・スコアが低い傾向が見られる。一方で、**SESが低い状況にあっても、ICT機器を活用する自信がある生徒は、各教科の正答率・スコアが高い傾向が見られる。**例えば、「ICT機器を使って学校でプレゼンテーション（発表のスライド）を作成することができる」という質問について、低SESグループであっても「そう思う」と答えた生徒は、高SESグループで「そう思わない」と答えた生徒より平均正答率・スコアが高い傾向がある。また、低SESグループは高SESグループと比べて相関係数が高くなっており、特に低SESグループの学力向上（SESによる学力格差の緩和）への寄与が示唆される。同様の傾向が小学校においても見られる。

○ なお、「ICT機器を使って情報を整理する（図、表、グラフ、思考ツールなどを使ってまとめる）ことができる」という質問においても、小・中学校ともに同様の傾向が見られる。

*本調査では、児童生徒質問調査での「家にある本の冊数」（生徒〔29〕）をSESの代替指標として利用している。

【家にある本の冊数】 × 【ICT機器を使ってプレゼンテーションを作成することができる】 × 【教科の正答率・スコア】

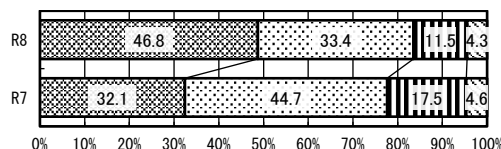
「各教科の正答率・スコア」



生徒質問 〔36-4〕

あなたは、自分がPC・タブレットなどのICT機器を使って学校での活動でプレゼンテーション（発表のスライド）を作成することができますか。

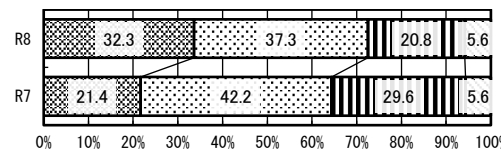
■ そう思う ■ どちらかといえば、そう思う
■ どちらかといえば、そう思わない ■ そう思わない



生徒質問 〔36-3〕

あなたは、自分がタブレットなどのICT機器を使って情報を整理する（図、表、グラフ、思考ツールなどを使ってまとめる）ことができますか。

■ そう思う ■ どちらかといえば、そう思う
■ どちらかといえば、そう思わない ■ そう思わない



グラフの見方

- 例えば、中学校国語では、低SESグループ（本が0～25冊）でICTの活用の質問に「①」と回答した生徒の箱ひげ図の箱は、中SESグループ（本が26～100冊）、高SESグループ（本が101冊以上）で「③」、「④」と回答した生徒の箱より上の位置にある。
- ×は、各選択肢の平均値を表している。
- 箱ひげ図の上部にある四角内の数値は、各SESグループごとの相関係数を示している。

令和8年度全国学力・学習状況調査でも、SESが低いグループほど各教科の正答率・スコアが低い傾向が見られた。（令和8年度全国学力・学習状況調査の結果（概要）P62より）。そのため、**47都道府県それぞれのSESが低いグループを取り出した上で各学力D層及びIRTバンド1の割合や平均正答率・平均スコアを比較した**。SESが低くても学力D層及びIRTバンド1の割合・平均正答率・平均スコアとICTの活用に一定の関係が見られた。

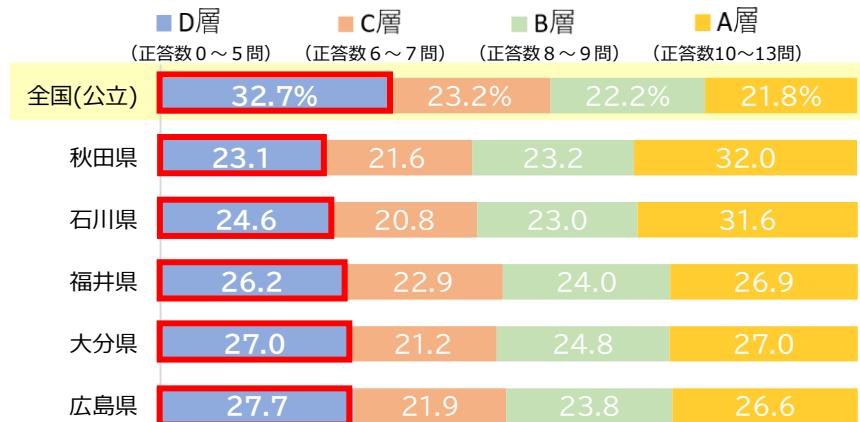
ポイント

低SESグループにおいて、学力D層の割合が全国と比べても少ない、又は学力D層の平均正答率が全国と比べても高い都道府県が見られた。低SESグループにおいて学力D層の割合が低い、または平均正答率が高い都道府県では、ICTを活用する自信について肯定的な回答をする低SESグループの児童生徒が多い傾向が見られた。

小・国語

※SES（Socio-Economic Status）：社会経済的背景。本調査では、児童生徒質問調査〔29〕「家にある本の冊数」をSESの代替指標として利用（低SESグループ（0～25冊）、中SESグループ（26～100冊）、高SESグループ（101冊以上））。

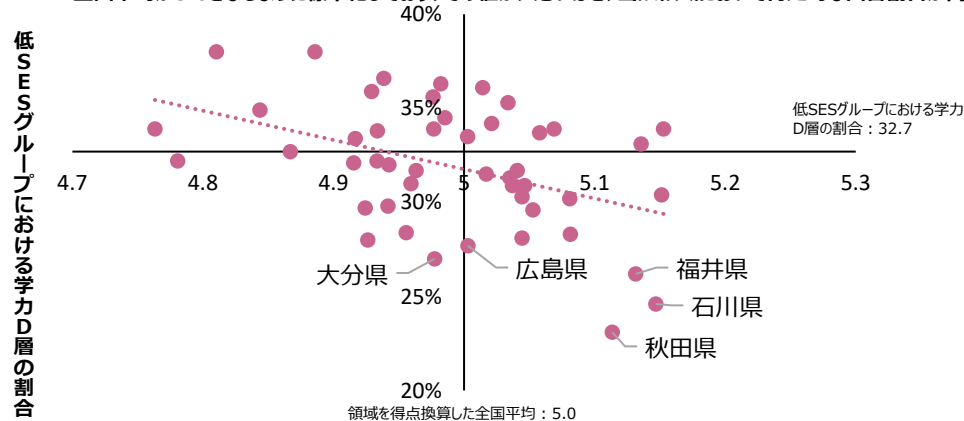
低SESグループで学力D層の割合が少ない5都道府県



縦軸：低SESグループにおける学力D層の割合(左) 平均正答率(右)

横軸：低SESグループにおける児童生徒質問調査のICTを活用する自信（36-1～4）の回答状況を得点換算したもの。

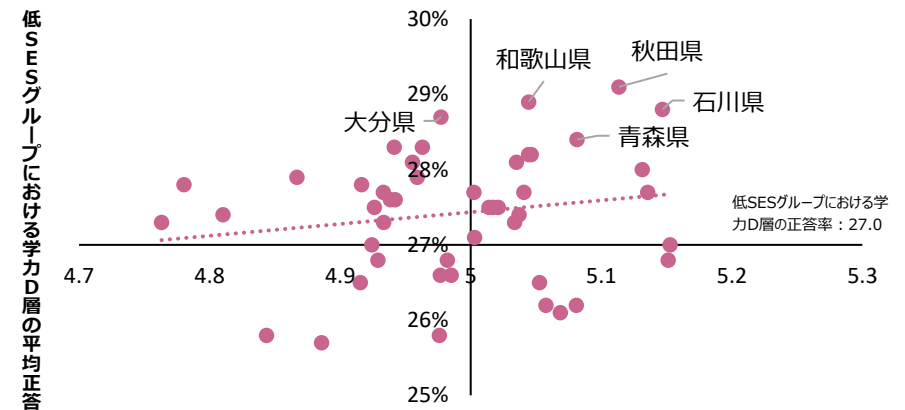
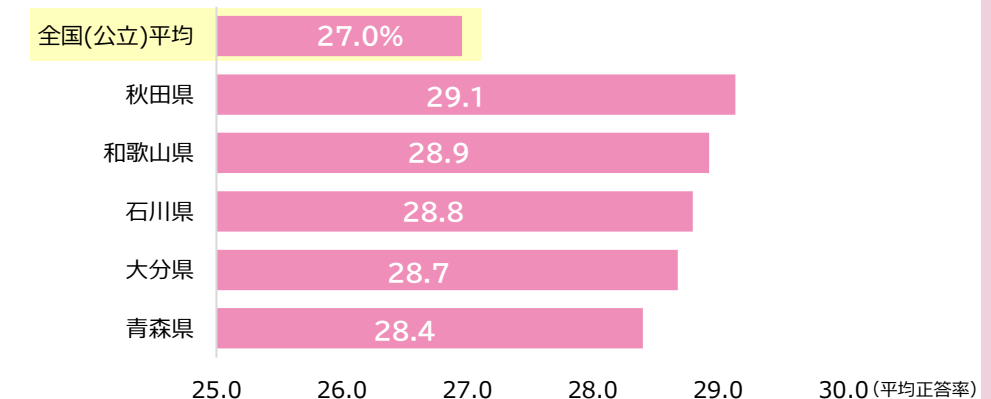
全国平均が5.0となるように標準化しており、その値が大きいほど、当該領域において肯定的な回答割合が高いことを意味している。



「ICTを活用する自信」について肯定的な回答が多い。

低SESグループで学力D層の平均正答率が高い5都道府県

※表示値は小数第2位を四捨五入して小数第1位まで示している。グラフは四捨五入前の数値に基づいて作成しているため、表示値が同じで場合でも、グラフの長さが異なることがある。



「ICTを活用する自信」について肯定的な回答が多い。

※他教科（中・国語、小・算数、中・数学、中・英語）においても同様の傾向。

PISA2025について

1. PISA2025の結果（概要）

PISA調査とは

概要

- 義務教育修了段階の**15歳の生徒**が持っている**知識や技能を、実生活の様々な場面で直面する課題にどの程度活用できるかを測る**ことを目的とした調査。
- **科学コンピテンシー、読解力、数学的リテラシー**の3分野について、2000年以降、おおむね3年ごと（2025年以降は4年ごと）に調査実施。各回で3分野のうちの1分野を順番に中心分野として重点的に調査するほか、回ごとに異なる教科横断的な領域を対象とする「革新分野」の調査も実施。
- 2015年調査より、筆記型調査から**コンピュータ使用型調査（CBT）**に移行。
- 平均得点は**経年比較可能**な設計とされているが、平均得点を比較する場合は、数値の差を見るだけでなく、**統計的に意味のある差（有意差）の有無が重要**。
- 3分野の調査結果を生徒や学校が持つ様々な特性との関連によって分析するため、**質問調査**（生徒質問調査、ICT活用調査（生徒対象）、学校質問調査）も併せて実施。

PISA2025について

- **91か国・地域**から約**76万人**が参加。日本からは、全国の高等学校等の1年生のうち、国際的な規定に基づき抽出された**183校、約6,500人**が参加（2025年6月から8月に実施）。
- 中心分野は、科学コンピテンシー。**革新分野は、ICTを活用した自律的な学習（自己調整学習）のプロセスを通して、問題解決し、その中で新しい知識を獲得できるかを調査するラーニング・イン・デジタルワールド（LDW）**。
- オンラインによるCBTで実施。
※2000年～2012年は筆記型調査、2015年～2022年はUSBメモリを使用したオフラインによるCBTで実施。

1. PISA2025の結果（概要）

PISA2025の結果概要（日本）

- 調査開始以降初めて3分野全てでOECD加盟国中1位。世界トップレベルを維持。今回、初めて実施したラーニング・イン・デジタルワールド※もOECD加盟国中1位（全参加国・地域中では、科学コンピテンシー5位、読解力4位、数学的リテラシー5位、ラーニング・イン・デジタルワールド4位）。
※ICTを活用した自律的な学習（自己調整学習）のプロセスを通して、問題解決し、その中で新しい知識を獲得する能力。
- 2015年以降、OECD平均は平均得点が低下しているが、日本は横ばい（平均得点のトレンドに有意な変化がない）。
- 日本は3分野全てで国際的に高い水準を維持し、一貫して社会経済的公正性が高い。一方、低得点層の割合の上昇といった課題も見られた。OECDは、生徒の学びについて、学習への関与（好奇心、忍耐力、自己調整）、学校や家庭からの支援、安全で公正な学習環境なども含め、多面的に捉えることの重要性を示唆。

平均得点・習熟度レベル別割合の変化

- 平均得点は、前回調査から読解力が有意に低下※（－13点）（OECD平均は、読解力（－15点）、数学的リテラシー（－9点）が有意に低下）。
- ※「読みの流ちょう性（速く正確に読む）」の設問の正答率は、有意に低下（OECD平均も有意に低下）。一方、「評価し、熟考する」に関する設問の正答率は、有意に上昇（OECD平均は有意に低下）。比較的長い課題文や複数の課題文がある設問、「情報を探し出す」「理解する」に関する設問の正答率は、前回調査と同程度（OECD平均は有意に低下）。
- 3分野全てで低得点層の割合が有意に上昇。高得点層の割合に有意な変化はない（OECD平均は、読解力と数学的リテラシーについて、低得点層の割合は有意に上昇し、高得点層の割合が有意に低下）。

分野名	平均得点の有意差（2022年比）		習熟度レベル※の有意差（2022年比）	
	日本	OECD平均	日本	OECD平均
科学コンピテンシー（中心分野）	低下したが有意差なし	低下したが有意差なし	3分野全てにおいて、低得点層の割合（習熟度レベル1以下）は有意に上昇、高得点層の割合（習熟度レベル5以上）は有意差なし	低得点層・高得点層ともに有意差なし
読解力	有意に低下	有意に低下		低得点層は有意に上昇、高得点層は有意に低下
数学的リテラシー	低下したが有意差なし	有意に低下		低得点層は有意に上昇、高得点層は有意に低下

※PISA調査では、生徒がどのような課題に対応できるかを示すため、平均得点に基づき習熟度レベルを設定している。レベルが高いほど、より複雑な状況において知識や技能を活用し、推論や問題解決を行うことができることを示し、レベル2が基礎的な習熟度レベルとされている。またレベルの段階は各分野によって異なり、読解力及び数学的リテラシーはレベル1c未満から、科学コンピテンシーはレベル1b未満から、それぞれレベル6以上まで設定されている。

1. PISA2025の結果（概要）

PISA2025の結果概要（日本）

社会経済文化的背景と平均得点

- 3 分野全てで、社会経済文化的背景（ESCS）※の水準が低い生徒ほど習熟度レベルが低い傾向は、OECD平均と同様。
※PISA調査では、保護者の学歴や家庭の所有物に関する生徒質問調査の回答から「社会経済文化的背景」（ESCS）指標を作成。
- 一方、日本はESCS水準別に見た科学コンピテンシーの平均得点の差が小さい国・地域の 1 つで、かつ、生徒の得点のばらつきにESCS水準が影響する度合いが小さい（一貫して社会経済的公正性が高い傾向）。

（参考）各分野の概要

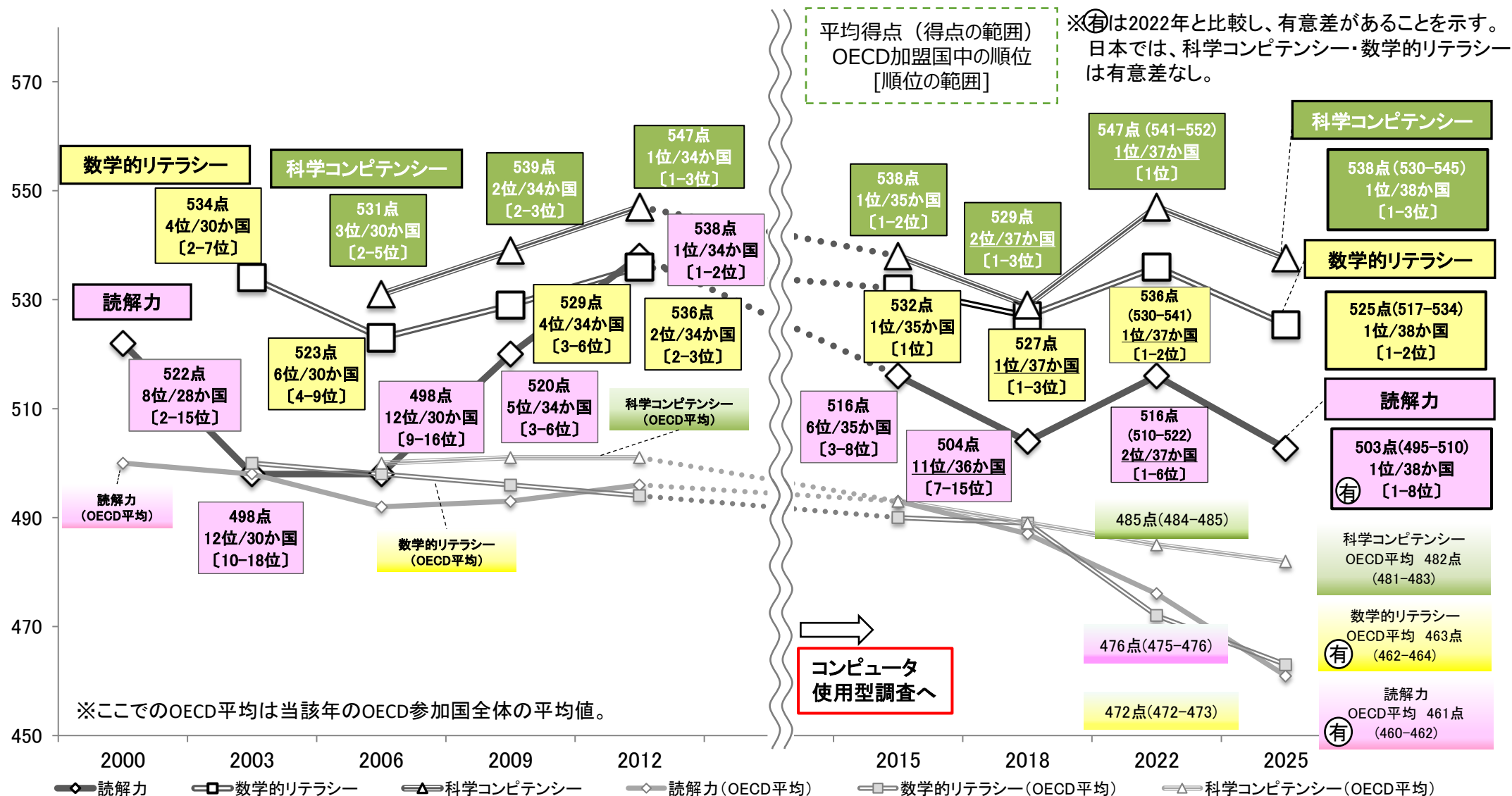
分野名	概要
科学コンピテンシー 【PISA2025における中心分野】	「現象を科学的に説明する」「科学的探究のための計画を構築し、評価し、科学的データと証拠を批判的に解釈する」「意思決定と行動のために科学的情報を調査し、評価し、利用する」能力。気候変動の時代における持続可能性の問題に取り組む能力（環境リテラシー）も含む。 ※2025年調査では、科学教育の成果として、科学に関する知識や理解のみならず、それらを活用して実社会の課題に対応したり、意思決定を行ったりするなど、「何ができるか」といった行動面に焦点が当てられている。こうした観点をより明確にするため、2025年調査では分野名が「科学的リテラシー」から「科学コンピテンシー」へ改称された。
読解力	自らの目標を達成し、自らの知識と可能性を発達させ、社会に参加するために、テキストを理解し、利用し、評価し、熟考し、これに取り組む能力。
数学的リテラシー	数学的に推論し、現実社会にある様々な文脈において問題を解決するために数学を定式化し、活用し、解釈する個人の能力。
ラーニング・イン・デジタルワールド（LDW） 【PISA2025における革新分野】※	ICTを活用した自律的な学習（自己調整学習）のプロセスを通して、問題解決し、その中で新しい知識を獲得する能力。

※ 革新分野は、主要 3 分野を超えた教科横断的分野について実施されている調査であり、内容は調査年ごとに異なる。今回調査のラーニング・イン・デジタルワールドは、「コンピューショナルな問題解決能力」と「自己調整学習」の 2 つの構成要素から成り立っているが、2026 年 9 月の公表は「コンピューショナルな問題解決能力」部分のみで、「自己調整学習」を含む LDW 全体は2027年に公表予定。

1. PISA2025の結果（概要）

PISA平均得点及び順位の推移

2015年以降、OECD平均は平均得点が低下しているが、日本は横ばい（平均得点のトレンドに有意な変化がない）。



1. PISA2025の結果（概要）

PISA2025 3分野及び革新分野の平均得点の国際比較

OECD加盟国（38か国）における比較 は日本の平均得点と統計的な有意差がない国

	科学コンピテンシー	平均得点	読解力	平均得点	数学的リテラシー	平均得点	ラーニング・イン・デジタルワールド	平均得点
1	日本	538	日本	503	日本	525	日本	557
2	エストニア	527	韓国	501	韓国	522	エストニア	541
3	韓国	526	アイルランド	500	エストニア	508	韓国	538
4	イギリス	511	エストニア	499	スイス	499	オーストラリア	532
5	カナダ*	510	ニュージーランド*	497	イギリス	488	ニュージーランド*	531
6	ニュージーランド*	509	イギリス	494	カナダ*	485	カナダ*	525
7	オーストラリア	509	オーストラリア	491	ポーランド	484	イギリス	523
8	フィンランド	504	カナダ*	490	オランダ*	483	スイス	520
9	アメリカ*	502	アメリカ*	490	アイルランド	480	チェコ	517
10	スイス	501	ポーランド	482	ベルギー	480	アメリカ*	513
	OECD平均	482	OECD平均	461	OECD平均	463	OECD平均	500
	信頼区間(日本)：530 - 545		信頼区間(日本)：495 - 510		信頼区間(日本)：517 - 534		信頼区間(日本)：551 - 564	

全参加国・地域（91か国・地域）における比較 は日本の平均得点と統計的な有意差がない国・地域

	科学コンピテンシー	平均得点	読解力	平均得点	数学的リテラシー	平均得点	ラーニング・イン・デジタルワールド	平均得点
1	北京・上海・江蘇・浙江	597	シンガポール	535	北京・上海・江蘇・浙江	612	マカオ	572
2	シンガポール	560	北京・上海・江蘇・浙江	527	シンガポール	563	シンガポール	563
3	マカオ	541	台湾	508	マカオ	549	北京・上海・江蘇・浙江	560
4	台湾	540	日本	503	台湾	546	日本	557
5	日本	538	マカオ	501	日本	525	台湾	551
6	エストニア	527	韓国	501	韓国	522	香港	545
7	韓国	526	アイルランド	500	香港	522	エストニア	541
8	イギリス	511	エストニア	499	エストニア	508	韓国	538
9	カナダ*	510	ニュージーランド*	497	スイス	499	オーストラリア	532
10	ニュージーランド*	509	イギリス	494	イギリス	488	ニュージーランド*	531
	信頼区間(日本)：530 - 545		信頼区間(日本)：495 - 510		信頼区間(日本)：517 - 534		信頼区間(日本)：551 - 564	

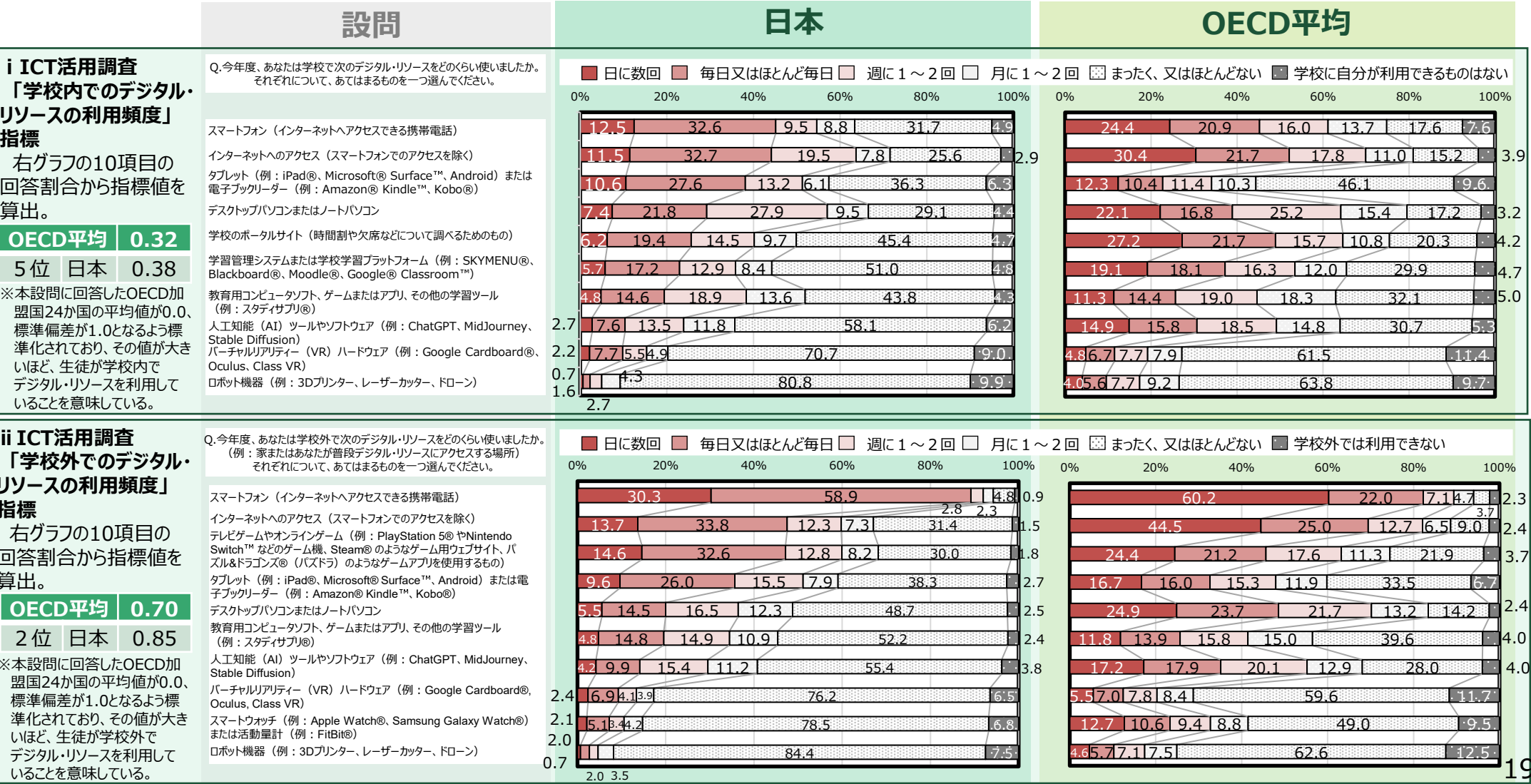
※国名の後に「*」が付されている国・地域は、PISAサンプリング基準を1つ以上満たしていないことを示す。

※信頼区間は調査対象者である生徒全員（母集団）の真の平均得点が存在すると考えられる幅を表す。PISA調査は標本調査であるため一定の幅をもって平均得点を考える必要がある。

2. 質問調査の結果（デジタル機器・AIの活用関係）

① 学校内・学校外でのデジタル・リソースの利用状況

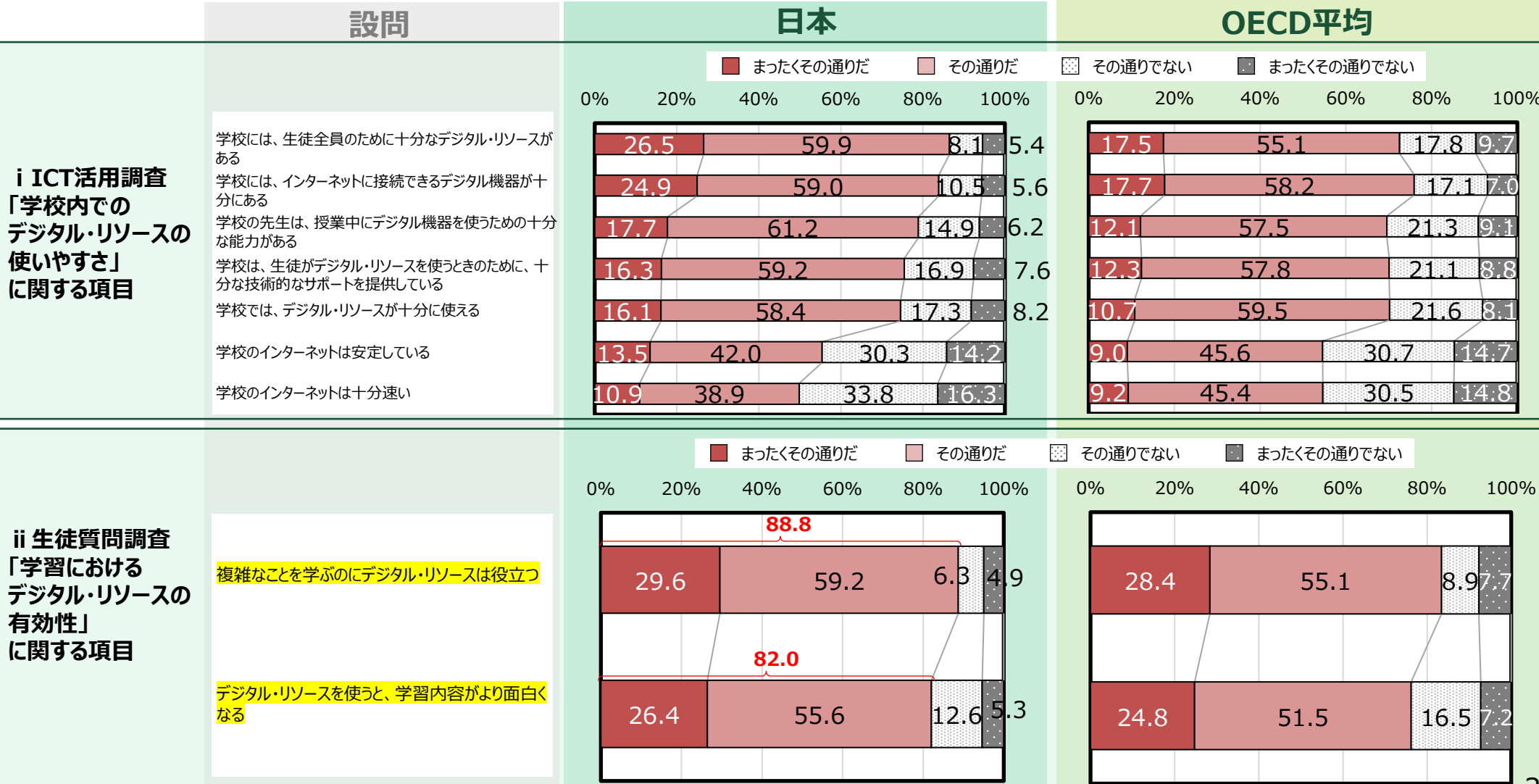
- 「学校内でのデジタル・リソースの利用頻度」指標は、OECD加盟国24か国中 5 位で、OECD平均よりも高い。
- 「学校外でのデジタル・リソースの利用頻度」指標は、OECD加盟国24か国中 2 位で、OECD平均よりも高い。



2. 質問調査の結果（デジタル機器・AIの活用関係）

② 学校内でのデジタル・リソースの使いやすさ／学習におけるデジタル・リソースの有効性

- 「学校内でのデジタル・リソースの使いやすさ」に関する項目について、日本は、肯定的回答の割合がOECD平均よりもおおむね高い。
- 「学習におけるデジタル・リソースの有効性」に関する項目について、日本は、肯定的回答の割合がOECD平均よりも高い。



2. 質問調査の結果（デジタル機器・AIの活用関係）

③ 教科別でのデジタル・リソースの利用頻度／デジタル・リソースの使用による注意散漫

- 教科別でのデジタル・リソースの利用頻度のうち、「すべての授業又はほとんどすべての授業」又は「授業の半数以上」と答えた割合が、日本は、これまでと同様、OECD平均よりも低い。また、2022年の結果と比較しても、活用割合は横ばい又は低下（OECD平均は低下）。
- デジタル・リソースの使用のうち、「生徒は、デジタル・リソースを使っているため気が散っている」という設問に「まったく、又はほとんどない」と回答した割合について、OECD平均よりも高い。

設問

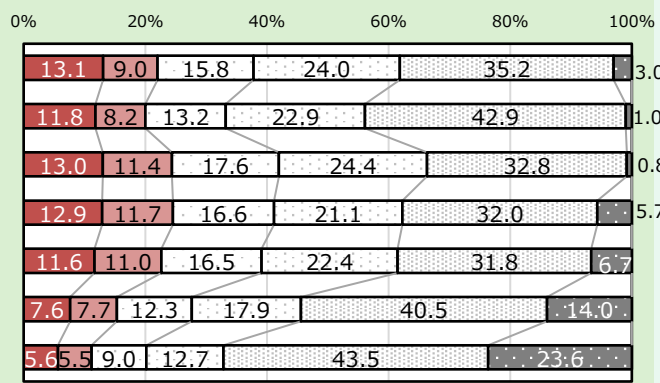
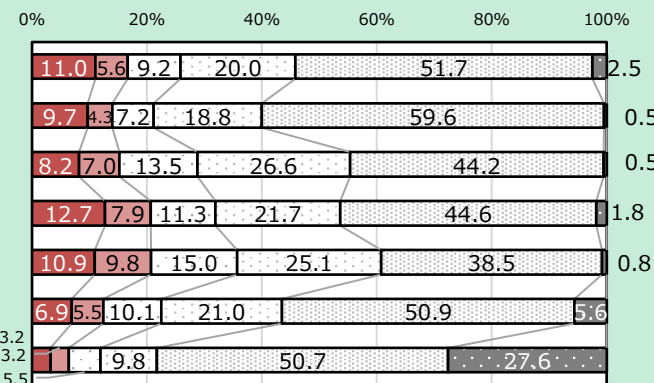
日本

OECD平均

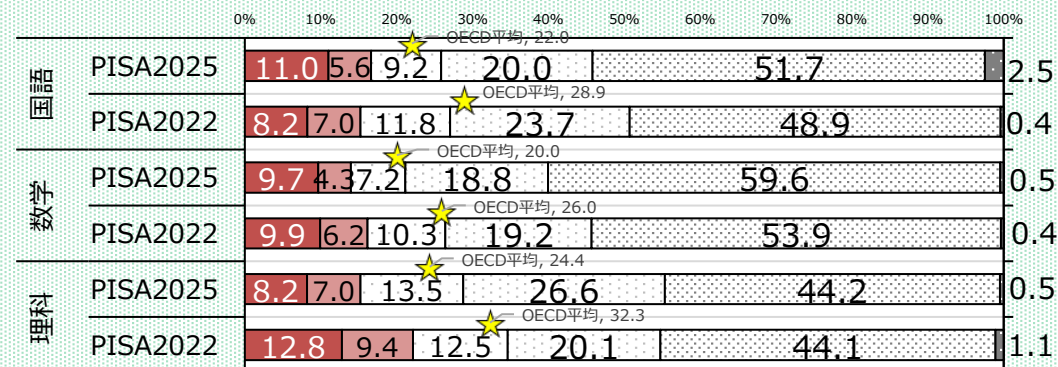
i 生徒質問調査「教科別でのデジタル・リソースの利用頻度」

■ すべての授業、又はほとんどすべての授業 ■ 授業の半数以上 □ 授業の半数程度 □ 授業の半数以下 □ まったく、又はほとんどない ■ この教科を受けていない

国語	11.0	5.6	9.2	20.0	51.7	2.5
数学	9.7	4.3	7.2	18.8	59.6	0.5
理科	8.2	7.0	13.5	26.6	44.2	0.5
人間科学、人文科学、社会科学（例：歴史、地理、公民、法学、経済）	12.7	7.9	11.3	21.7	44.6	1.8
外国語	10.9	9.8	15.0	25.1	38.5	0.8
芸術（例：美術、音楽、ダンス、演劇）	6.9	5.5	10.1	21.0	50.9	5.6
実業科目又は職業訓練科目（例：機械と修理、看護、建設）	3.2	3.2	5.5	9.8	50.7	27.6



ii 教科別でのデジタル・リソースの利用頻度の経年変化（日本）



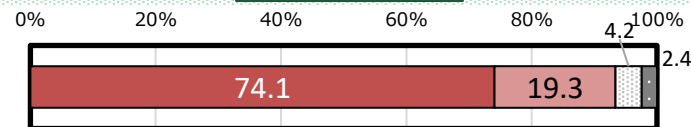
iii 生徒質問調査「デジタル・リソースの使用による注意散漫」（日本/OECD平均）

■ まったく、又はほとんどない ■ たまにある ■ たいていそうだ ■ いつもそうだ

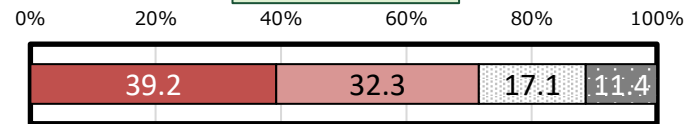
理科の授業で、次のようなことはどのくらいありますか。それぞれについて、あてはまるものを一つ選んでください。

生徒は、デジタル・リソース（例：スマートフォン、ウェブサイト、アプリ）を使っているために気が散っている

日本



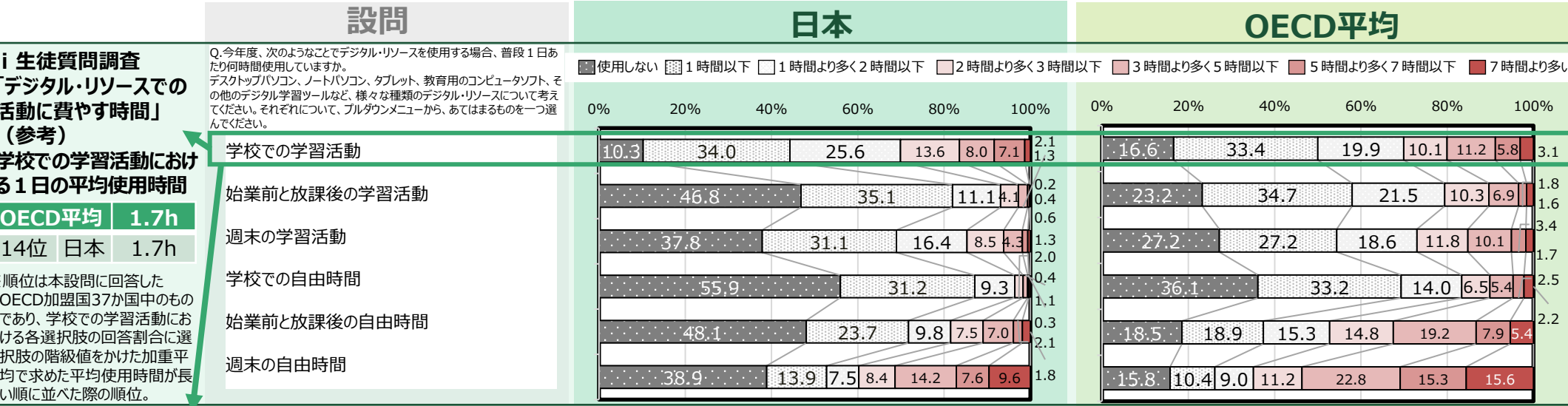
OECD平均



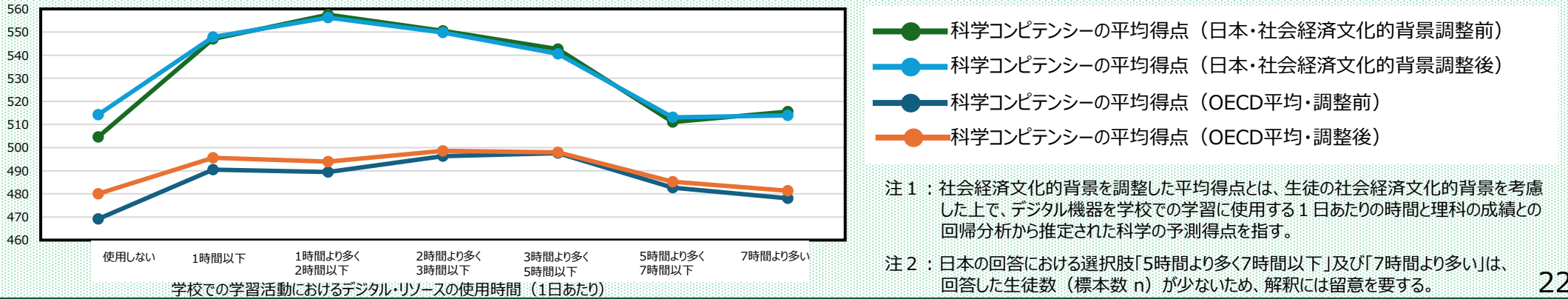
2. 質問調査の結果（デジタル機器・AIの活用関係）

④ デジタル・リソースでの活動に費やす時間

- 学校での学習活動における「デジタル・リソースでの活動に費やす時間」は、日本もOECD平均も、ともに1人あたり1日平均1.7時間程度。
- 日本、OECD平均ともに、**学校での学習活動においてデジタル・リソースを適度に使用する場合、科学コンピテンシーの平均得点は高い傾向が見られる。**一方、**使用しない、又は長時間使用する場合には、科学コンピテンシーの平均得点は低い傾向が見られる。**



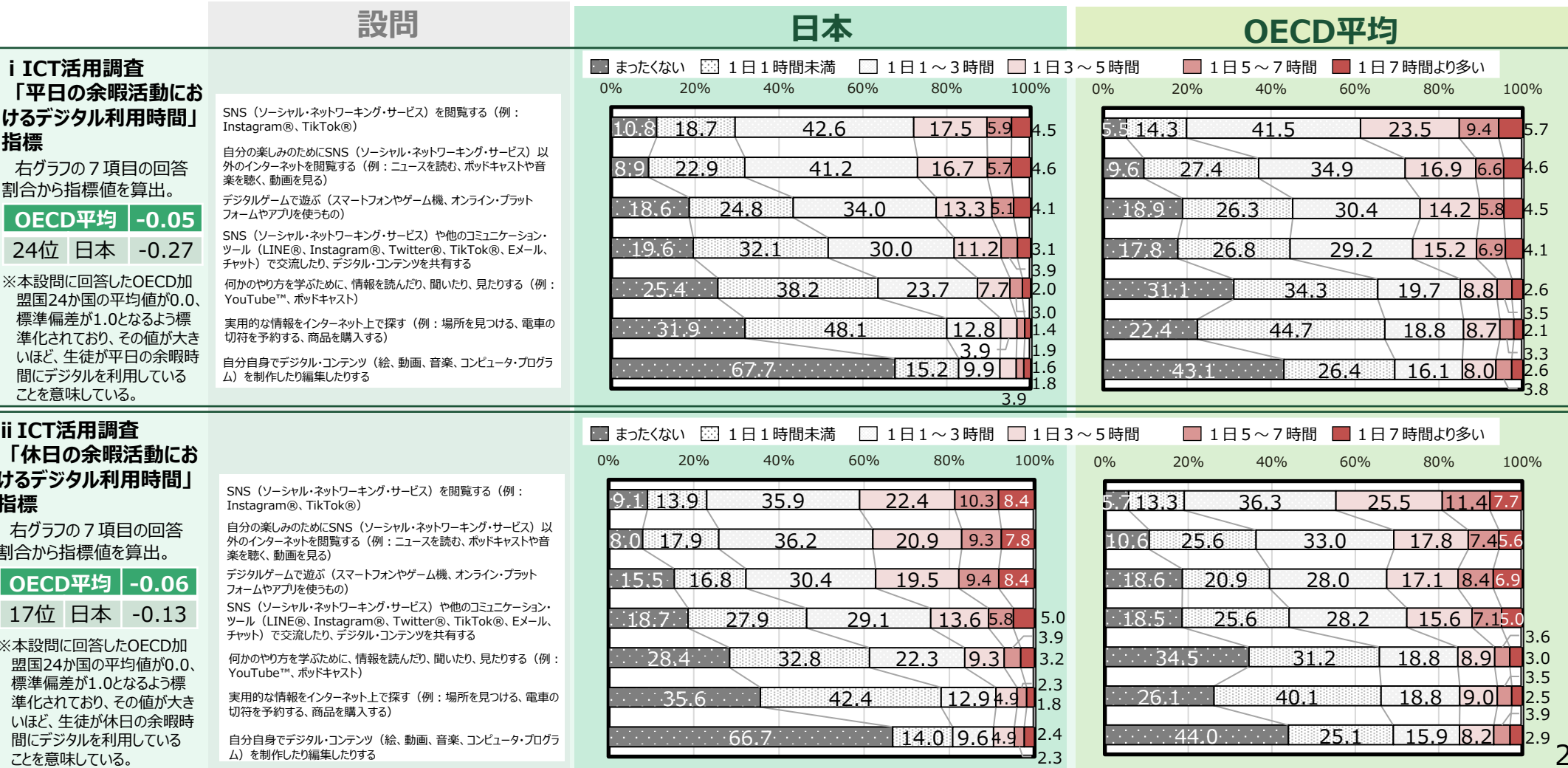
ii 学校での学習活動におけるデジタル・リソースの使用時間と科学コンピテンシーの平均得点（日本/OECD平均）



2. 質問調査の結果（デジタル機器・AIの活用関係）

⑤ 平日・休日の余暇活動におけるデジタル利用時間

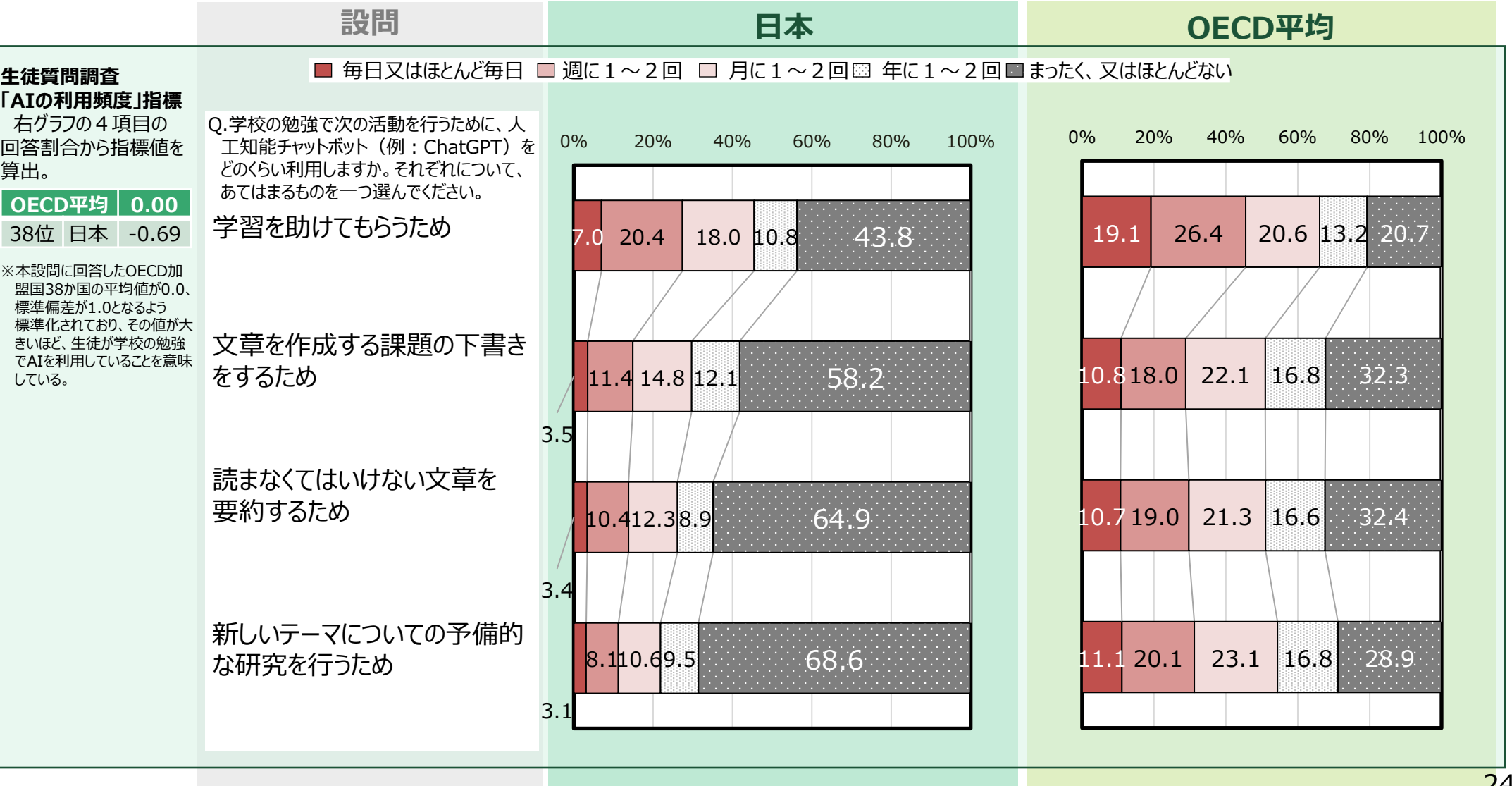
- 「平日の余暇活動におけるデジタル利用時間」指標は、OECD加盟国24か国中24位で、日本はOECD平均よりも低い。特に「SNSを閲覧する」時間について、日本は平均2.3時間であり、OECD加盟国24か国中24位（OECD平均は2.8時間）。
- 「休日の余暇活動におけるデジタル利用時間」指標は、OECD加盟国24か国中17位で、日本はOECD平均よりも低い。特に「SNSを閲覧する」時間について、日本は平均2.9時間であり、OECD加盟国24か国中20位（OECD平均は3.1時間）。



2. 質問調査の結果（デジタル機器・AIの活用関係）

⑥ AI（例：ChatGPT、Google Bard）の利用

● 学校の勉強における「AIの利用頻度」指標は、OECD加盟国38か国中38位である。

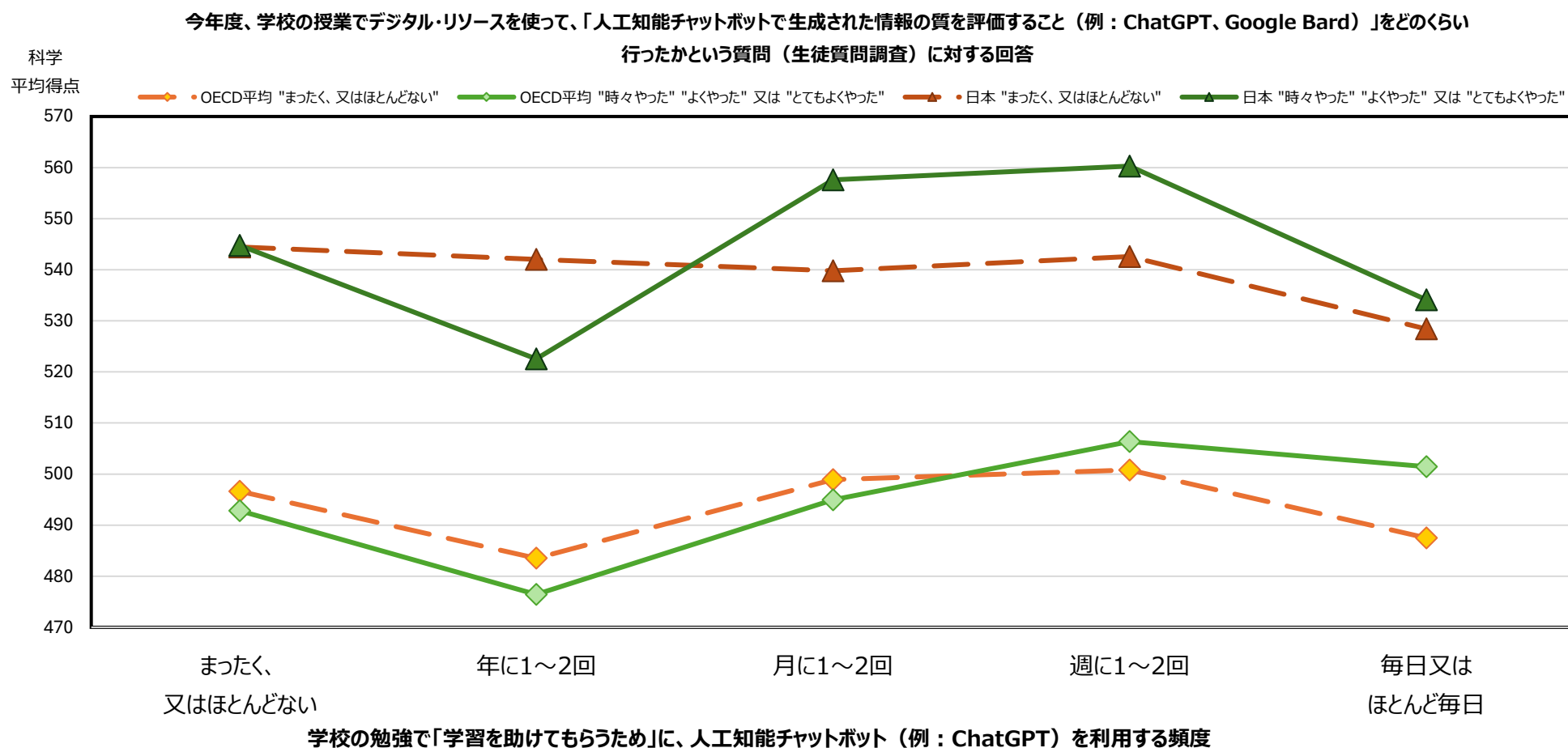


2. 質問調査の結果（デジタル機器・AIの活用関係）

学校におけるAIの使用頻度と成績

- 学校で、AIによって生成された情報の質を評価することを学ぶ機会があり、かつ、AIを学習の助けとして適度に利用する生徒は、そうでない生徒に比べて、科学コンピテンシーの平均得点が高い傾向にある。

学校でAIに関連する学習機会の有無（学校の授業でAIが生成した情報の質を評価した頻度）
及び学習の助けとしてAIを利用する頻度別の科学コンピテンシーの平均得点（日本/OECD平均）



3. ラーニング・イン・デジタルワールド（革新分野）の調査結果

① ラーニング・イン・デジタルワールドとは

革新分野とは、主要3分野に加えて実施される教科横断的な調査領域であり、調査内容は調査年ごとに異なる。
PISA2025の革新分野であるラーニング・イン・デジタルワールド（Learning in the Digital World:略称LDW）は、ICTを活用した自律的な学習（自己調整学習）のプロセスを通して、問題解決し、その中で新しい知識を獲得する能力。

今回調査のLDWは、「コンピューショナルな問題解決能力※」と「自己調整学習」の2つの構成要素から成り立っているが、2026年9月の公表は「コンピューショナルな問題解決能力」部分のみで、「自己調整学習」を含むLDW全体は2027年に公表予定。

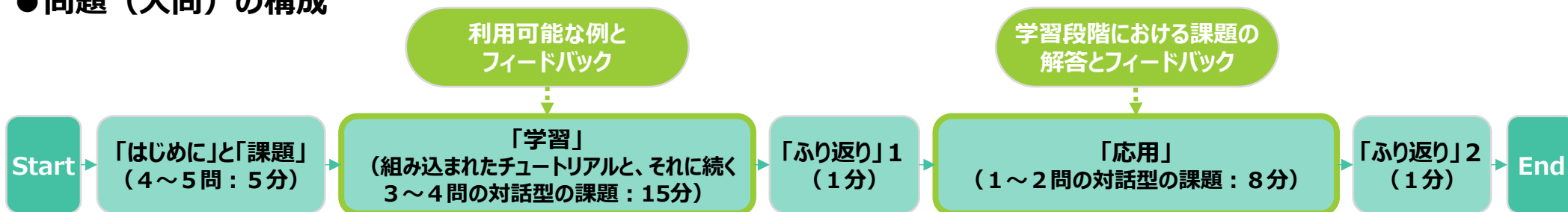
※コンピューショナルな問題解決能力とは、プログラミングツールなどを活用して課題を分析し、その解決に必要な手順や方法を考え、コンピュータで実行可能な形で構築する能力である。

② ラーニング・イン・デジタルワールド（コンピューショナルな問題解決能力）の平均得点・習熟度レベル

- 日本の平均得点は557点であり、**OECD加盟国中1位**（順位の範囲：1位）。
- 習熟度レベル1以下の生徒の割合は9.0%（OECD平均は22.7%）、習熟度レベル5以上の生徒の割合は48.0%（OECD平均は26.1%）。

③ 問題内の課題構成と採点について

● 問題（大問）の構成



● 採点

採点は、全てコンピュータによる自動採点。生徒のプロセスデータに基づき、自動的な評価と採点コードの割当てが行われる。最終的な解答の正誤だけでなく、解答に至るプロセスも客観的に測定。

3. ラーニング・イン・デジタルワールド（革新分野）の調査結果

④ 具体的な設問例（2025年公開問題）

リサイクル クレーン

ブロックベースのプログラミングツールを用いてリサイクルクレーンを制御し、さまざまな物を効率的に分別するためのアルゴリズムを構築する。

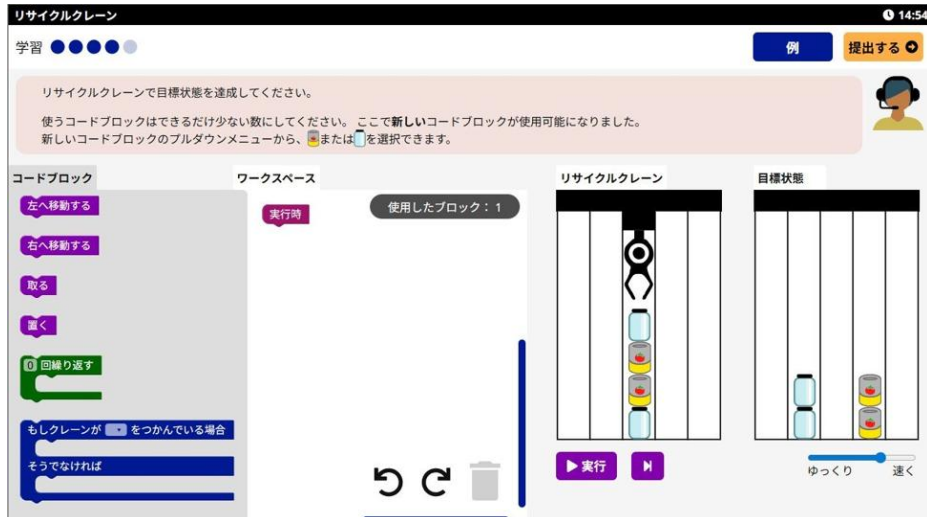
1 コードブロックを使用してクレーンを動かす方法を学習する



2 プログラムの修正に取り組む



3 目標に向かって、効率的なプログラムの構築に取り組む



- ラーニング・イン・デジタルワールドの大問は「はじめに」→「課題」→「学習」→「応用」の4段階で構成される。
- 「はじめに」と「課題」：この問題のシナリオについて説明を受け、事前知識の測定を目的とした、選択肢形式等の問題に取り組む。
- 「学習」と「応用」：コードブロックを使用してリサイクルクレーンを動かす方法を学習し、より複雑なプログラムの構築に取り組む。